

勝として攻寄なは足下何とて利を得へき只速かよ國府や參將軍の命令を守り子孫長久の榮を見玉へと頻に謀論せとも家衛會て之を聞す兎も角兄弟一家敵となるからい吾一人の身となりて合戦するこり本望なれ千日千夜口説とも益無き事止玉へと言ねて清衛呆れ果兄弟の縁も是まてなり再會の戰場までこり爲へれれと足下の首の鳥木も掛らるゝを見るも忍ひすと言捨々立歸けるよ家衛の是を耳も掛はこり聽て家臣の鳥の海彌三郎を呼出し近く進て

編者曰此鳥の海彌三郎の家衛の乳人よて武勇與羽を肅かば然も忠信無二の者あり申けるは兄清衛の幼少の時より我父武則將軍よ養育を受成長せし者よして頼義父子よ誅戮されたる巨權太夫經清か一子なり經清真任が妹を娶て生せたるなれの真任は彼か母方の風も當れり

奇くも清衛勇士の志あらは義家の來るこり幸思立事有へきを結句某か事を舉ると妨げんとす奇怪千万の臆病者なり頼はすへきの思もよらす此上は吾壹人よて日本國中の軍勢を引受戦かひんは何程の事かあるへき速かよ軍勢催促すへしとの詞は彌三郎は固より智謀深けれの暫く黙して有けるか君一定事を揚んと思めし立玉つゝ無熊の軍を仕給ふへからす今當城よ此儘ありて敵を引受よ至ては將軍定めて自身よ來り玉ふへし左ある時は眞衛清衛を始めとして奥羽の軍勢こどく馳集り大軍を以て攻掛らる此城十日の支がたし法かし緩々の謀計を用ひ一ト先出羽の國沼の柵よ退きて穩便の形を示し密に兵を集むる時の故將軍の舊恩ある國あれば必ず人敵の馳集るを疑ひなしかくする時の一旦平定の形を成せば家衛こり本國出羽の舊領へ引退きて當領の己よ替たる事なれば最早合戦の有べからずと油断すると必定なり其

申す我我兵力を養ひて其怠たる所を伺ひ旗を揚ぐ且金澤は
 究竟の要害なれば此處を守て一戦せば勝を得なからばやと評
 議一決して出羽の國沼の柵より退去せける扱ても義家將軍は家
 衛一家の者共が當領を引拂て舊領沼の柵へ退き一先當地の治
 るといへども彼か心底甚たいぶかし是我を油断せしめん計略か
 ら計りかたし國境の形勢地理を巡覽旁々人数三百人を引進て鹿
 を居へさせ犬を牽せて處々を遊獵し玉ひつゝ國內の善惡邪正を
 察し給ふされば所在の領主の面々何れも迎ひよ出發應等閑なら
 ざりし夫より出羽の國に至り沼の柵の領分よ入らんとし玉ふを
 家衛聞て大ひよ悦こび是ぞ天の與ふる所取されば其殃ひを受る
 言將軍の小勢を押圍て討取と囊の物を探が如しと國境なる冠小
 坂よ出張し此處を戰場と定め宗徒の士卒八百余人鳥の海彌三郎
 を先陣として其外近郷近在の溢者を呼聚へ冠小坂の山陰は楯を

並へ弓を配り討て取んと待掛たり義家將軍の雜兵置み三百人を
 召具し給ひ何心なく名勝古跡を遊覽し給御側より唯權五郎景政
 三浦孫太夫爲次大宅光房等のみよて何心なく遊獵し玉へとも預
 て申合玉ひ間諜を入て家衛が形狀を略探偵せしめ去よ逆賊共此
 處へ二千人計よて待構要撃せんと用意せりと注進しければ血氣
 の面々聞と均しく大よ喜こび直よ押寄蹴散さんと勇げる權五郎
 景政怒て言上しけるはいがよも不逞なる家衛が舉動よこり某御
 先いたすべしと勸めしせば義家將軍言れける我巡視して此地
 よ來る其故の家衛が逆心あるや如何やと試みん爲なれば固より
 合戦する心あし況て公務よ非ずして遊獵と唱ふれば到底私行と
 言へきのみ今討破るの易けれども然すれば誼諱同前よて將軍職
 の威儀を失ひ朝命を辱かしむる者よ似たり且此遊獵も沼の柵へ
 行ずとも事足なり若我今日公務ならば打破りて通行するはいと

鞭くあるものをばやるよ及ふとわいと制し玉ひて響つらをか
 て翻し此邊の諸名勝を詠め悠々然として歸玉ふ家衡此よしと聞
 て急よ追蒐んとあしけるよ既道里も隔たり日も暮よ及びければ
 扱も臆病なる大將かな我此所よ居を聞武勇よ怖れて引返しぬ是
 我よ及ばざる故なりと獨誇て軍兵を市の場といふ所まで引返し
 休息し翌日沼の柵へ立歸り未四五日を経たる間よ又沼の柵を出
 發し羽州金澤の城よ楯籠ければ是より奥羽大乱と成り成よける
 是よ家衡の弟武衡は兄弟三人の中よても殊よ勇氣の者なれば清
 衡とは常よ不和よて家衡とのみ親しみしが此回家衡金澤の城を
 守て叛逆せりと聞くと直よ手兵三百余人を引率して金澤の城よ
 來り家衡と一所よ成て籠城をぞ仕たりける扱も家衡武衡一所よ
 成て叛逆よ奥羽の土地の云よ及ばず近國近郷の獵夫盜賊を収用
 し野武士惡徒を招集しければ所在の巨盜猾賊とも時を得たりと

五人十人と馳加り己よ二万余人の大勢と成り成ければ所在の領
 主急馬を以て將軍へ注進すると楯の齒を引が如くあれば義家將
 軍怒玉ひ我嘗て平和を以てきて戦ひを好ざるの一旦兵端を開く
 時之を收ると尤難し其間人民の艱難困窮幾許ぞや是を思ひ彼を
 慮ばかり多少心を勞せしより真衡秀武既よ和順志て事爰よ治ま
 りける如何なる故ぞ家衡一人邪心を懷き兵よ弄して國を乱すや
 今よしての許すべからず速かよ出馬して其不享を懲すべしと國
 中并よ近國へ下知を傳へ又兵糧の準備よ及べられる促催よ應ず
 る人々の先當國の軍兵よ清原真衡清原清衡を始めとして清家
 の一族一万余人又よ家人よは相摸國の住人三浦平太夫爲次鎌倉
 權太夫景成を始各兵をひきおて馳來る既よ當國の武士御家人は
 到着したれ共外様他門人々は未一人も來ざる所よ第一番よ馳來
 るの武藏國の住人秩父十郎武綱なり其相貌勇々しくして剛氣面

願たり將軍の前へ出申けるは武藏國は一家一門大勢是有といへ共其者共の馳集まるを相待時の遅延よ及はん事を恐れ見兵三百余人を召連伺侯いたせり指揮を仰ぎ奉ると演ければ義家大よ悦び玉び感稱あまて近く呼寄武綱豫ての詞よ違はず早速又參着の事大慶なり迎白旗一流賜りければ武綱拜伏して弓矢の面目と悦びける間もあらせず秩父の一門家人共追々と馳來り三千余人と成よけり常陸國よりは笠間莊司一家と擧て馳來り下總國よりは千葉介常政舎弟下野前司經重出羽國よりは吉彦秀武城太郎馳來り軍兵國府は居餘ければ寺院民屋を退去せしめ之を陣營と定めたり此軍兵は將軍の麾下七千余人を合て三万余人と記されける既よして出陣首途の響應ありて諸士を召されて酒盃を賜り各々勇み進みて出陣しける

權五郎景政先陣と願事

扱も將軍よの出陣の響應終て軍勢を手配ありて先秩父十郎武綱を召て命じ玉ふは此度一番は馳參之條神妙なり依て先陣と命するなり益々軍忠を盡すべきの旨を以別よ盃を賜りければ誠よ家の面目此よ過すと人々羨やみける所は鎌倉權五郎景政進出て申けるは凡う先鋒の事他門は譲るへからざるなり某か家は源家譜代の臣として往時安部貞任追討の時も臣か自父加藤修理允景道之を承玉ゆる其弟たる鎌倉權太夫景成即臣か父よして老体なれとも陣へ參着せり若老体の故を以て先鋒免許是あしとあらば臣攝して以て行も先鋒の任を辱しむると有へからず某こり先陣すへき事至當の理なり何う武綱よ先陣を譲るへきと居丈高よ成て申ければ將軍之を聞玉ひ景政の一言尤潔よし然れと武綱一番は馳來と稱すへき事ゆへ既よ先陣を命せし上の景政よの大手武綱よの擲手相分れて共よ先陣たるへまを雙方無事の詞

よ景政武綱下知を承たまひりて退きける去る程も寛治三年六月十六日又出陣と相定め第一老大宅太夫光任を鎮守府の留守を命せらる光任當年八十三才白頭を白布よて鉢巻といと勇しく出立て此處へ出來將軍の馬の手綱を無手と握り涙をいらくと流して申けるは實よ老朽たる程口惜きものはあらずかし向よ故將軍與州御征伐九年の間竊綱を負御馬前よ從ひ百折千挫の其間と奔馳して一命を塵芥よ比し万死を出て一生を得し事幾度よかありけるを今年君の降下向よ都よ留まるへきの旨命せられしよ名残惜くは供よ供よ當國まで付添奉りしも出陣よは足手まといの九十九髪寄る年波ころ怨みなれせめて御出陣を祝志奉らんと是まで推参仕りぬと涙を収て又云けるは御方の大軍勇威を以賊の鳥合の寡兵を伐は磐石繼卵の譬の通御勝利疑がひ有べからず速かよ賊首乃首級を取持せ御凱陣とありまほしと扇を以て扇を

立扇ぎ立御喜びを申ければ將軍痛ましく思しめし賊よ故入道殿の御時の勇士今残りたるは汝一人能も首途を祝したる汝は國府よ留守たるも悴光房は我側よあるなれば追付悴が功名を土産となして歸陣すべしとありければ光任後よ挫と坐し兩手を揚て將軍を拜まあら有がたき仰かな二代の君よ奉仕してかゝる御懇の御意を請其上悴光房は御家臣多き其中よ鎌仗を命ぜらる事分よ過たる尊思の仰せ子孫よ傳へて忘はせじと落涙してぞ悦びける此光任子息三人ありけるが何れも天死して繼よ光房一人残りし事なれば左も有べしと人々云ぬ此時悴光房は謙仗の役を蒙り御先よ進みたりしが今父の御馬前へ出來しを見るよりも名残惜く今一度訣別の詞をかはさんと父の側へ馳來りて拜伏すれば光任は是を見るより衡立上り手に執る杖よて光房が胃の天べんを續打よ打すゑて撮たと脱んで言けるはいかよ光房汝大切の役目

を蒙り親も名残の惜きとて立歸り來こり未練あれ三万余人の大軍が私情よ由て公儀を忘る狼狽者と汝を指て咲ひやせん其職を受たる上は父母の今わよ及ふ共節を守て動かぬこり忠とも武ともいふべけれ早と去て職位を守れ虚氣ものめといよく杖を留めねば人々感涙を流しける將軍よも此体を覽玉ひて落涙數行し玉へり己よ御出陣勇々しく馬を進め玉ふ先陣は鎌倉權五郎景政秩父十郎武綱兩人二陣の三浦平太夫爲次本陣を引下りて後陣の清原眞衡吉彦秀武其外相摸下總の軍勢引ふたり扱又金澤の城中よの家衛武衛將軍の大兵よて押寄玉ふと聞ければ兵を要害よ分配し橋をかけ弓を張てり待掛たり抑此金澤の城といふ山間よ築き立城中廣く險阻よして攻るよ難く守よ易かり加のみならず家衛武衛叛逆心の初めより溝を深くし壘を高くし武器兵糧山の如く大手の家衛擲手は武衛鳥の海彌三郎を軍奉行として総勢合

て二万余人城外よ柵押出して鹿皆巡らし守城の策を十分よ構へたり同七月三日將軍三万余人先陣後陣押詰て十重廿重と取圍み関をどつとぞ上たりける擲手の先陣秩父十郎武綱三千余人眞先よ攻進み後陣の常陸の笠間一統又大手よは鎌倉權五郎景政二千余人後陣は兒玉平山黨扣たり東の手の三浦平太夫爲次和田爲宗一千余人よて押詰たり扱も擲手の先陣秩父十郎武綱の源家へ屬する日の淺けれの未一功も立さる故若も鎌倉權五郎景政よ劣たらんよは未代までの恥辱なりと拜領の白旗と陣頭よ翻かへし兵を下知えて一番よ進柵際近く成ると一同矢を射かけ関を合せて押寄たり城中此口よの越後の勢の堅めたるか白旗と見よりも源家の氏族よ紛れなし近進ませ討取れと送ふ争ひ我先よと柵外へ打て出んとする時よ武衛一陣よ進みてあれ追崩せと下知しければ郎黨尾河庄司太夫直行眞先よ進み英兵擇て七百余入柵の門を

八文字は押開きて一同は打て出たり官軍是を見るより大に悦び
 ずはや城兵の出たるぞ押取圍て討取と進む程は十郎武綱下知を
 傳へ引組で首よせよと勵しき詞は小澤小平次士卒を引て風發し
 城兵を鉄壁と討圍み余さし者と切立たり城將武衛是を見るより
 も長途を來りし疲武者何程の事かあらむ一同は討立よと其身具
 先よ進んで切立ければ是は屬まさされ城兵勢強く難立れば官軍の
 兵士遂は追立られ三丁余り引立たり武綱此時大に怒り汚なきは
 方の面々かかないて武綱か討死して泉下は面目をすくべしと馬
 の首を押廻し蒐出んとする處を小澤平次履しと止め某先掛致さ
 んといひつゝ先へ驅拔て尾河莊司よ切て掛る尾河の武衛が勇
 て打物取ての達人と呼ばれた者なれば小澤を見るより馬驅よせ戦
 事二十余合よして小澤を馬より切て落す武綱是を見るよりも當
 の敵還さじと三人張又十五束きりくと引堅め切て放せの思ふ矢

坪を少しも違へず尾河莊司が眞甲の腦を推いて射込たり何かの
 以て堪へき馬より落て死んでけり是よりて寄手の軍兵勢ひよ
 乘て三千余人一同よどつと押かゝる武綱采麿打振てすいや軍の
 勝たるぞ進めくと下知すれば従かふ兵士三千余人勢こんで切立
 る尾河の兵士大將を討れて忽崩立柵内へこり逃入たり十郎武綱
 勇進みて今此柵を踏破りて攻入らば落城すると眼前ぞと其身眞
 先は驅立ればあわや此柵破んと見る所は鳥の海彌三郎家時の兼
 て遊軍二百余人を引率して城中より來りけるが此形勢を見ると
 ひとしく士卒を下知えて自身陣頭は進みて横合より切て掛る其
 兵勢の銳きや城兵一同よ取て返し官軍を柵外へ追出し木戸をひ
 しくと銷しつゝ矢石雨の如く射出しければ官軍討るゝもの數を
 知ず十郎武綱合戦の勝たれ共敵は新手の加はりて火急に乗入
 らんとせば兵士多く討たるべしと士卒を纏めて本陣へ引揚暫く

息を休めけり鳥の海に寄手の遠く退ぞくを見て柵門を堅く守らせ城中の烈しき方を扱ひんと諸方を巡見したりけり

權五郎景政勇猛の事

扱又官軍大手の先陣鎌倉權五郎景政は二千余人と引率して城下の柵へ押寄て関をどつや揚たりけれの城の守兵等是を見てすのや敵の柵へ付りと駭立て見えたるを家衡下知して百五十人の撰兵を引て柵外え突出せり景政是を見るよりも雀躍して大に悦ひ自具先よ進み當手の官軍鎌倉權五郎景政先陣に向ひたり我と思はん人々の來て太刀の切味を試すや如何うと呼りながら郎黨十餘余りと左右よ從へ群がり來る城兵へ面も振す馳向八方よ斬て建り十方よ馳散せり瞬時の隙よ十八騎まで切て落し猶も進みて城に入る有様鬼神なり共斯までよのよも有まじと思はれければ城兵此よ辟易して散々よ崩れ立柵の中へ逃入るを景政屹と之を見

てすの敵の柵中へ逃入る此機よ乘じて付入ると下知を爲つ身柵の木戸へ乗入れの是よつゝきて寄手の兵士我劣らじと乗込て八方を薙立れの城兵堪へず外柵を打捨て城中へこり逃入けり景政容易よ外柵を攻落して勝関を揚けれの官軍の諸士勝誇たる勢よ堀際近く攻詰たり又一方の虎口よの三浦平太夫同平三郎和田左衛門を始めとして息をもつかせず攻進む中よも三浦か譜第比家人とも既よ城の堀際よひしと寄詰乗入らんとする時城中より一隊の兵卒突出せり是則鳥の海彌三郎家時あり搦手の危急を極て柵取返し又此よ來りて虎口を防かん爲なりけり此時三浦平太夫爲次大音あけ城兵打て出たるの願ふてもなき幸ひなるり附入よして城乗取と五百余人と左右よ從かへ鳥の海か兵へ討て掛る鳥の海の手兵半を引分て左へ廻し三浦が勢の横合より射手を選んで散々よ射させければ三浦が兵此積矢よ辟易して射殺さる

もの敷を知らず崩立て見えければ彌三郎家時此体を見るより
もすの寄手は引色なるぞ此機に乗じて盛しよせよと大薙刀を閃
めかし真先も切て廻り忽十八九人を切倒しければ三浦の軍兵大
よ敗れ我れ先よと引退く三浦爲次此と見るより牙を噛み大に怒
り甲斐あき者共れ敗れかな御方の諸軍は皆勝たるよ我一手のみ
敗走せば人よ嘲けり咲れて面を向くべきやうなむ唯此處は死
ねかしと大音あげて下知を傳へ其身の三尺八寸の太刀を真甲よ
差騎し群る敵を四角八面よ斬倒し猶も進みて戦へば是勢ひは屬
まされ三浦勢どつと開きて取て返し各々必死と働けば敵味方共
討ると者夥たしく屍の積で山の如く血の流れて川を爲りや
半時間の戦ひも双方死傷の多ければ三浦勢の本陣へ賊兵の城中
へ交綏もころ爲よける扱も鎌倉權五郎景政は大手の外柵と乗取
て賊兵城え逃込しかば賊將家衡大に怒り鳥の海を呼寄て汝菟向

て寄手を追拂と下知しけれ彌三郎家時直も馬も打跨り手兵を引
て大手も向ひ其形勢を見渡せば外柵は已も全破落寄手の軍兵柵
中も群聚して尙も城門を攻破らんと取圍む折柄なれば鳥の海家
時此手の機を見る。と均しく今此儘も防戦忽せなる時の忽ち本城
を乗入べし一戦して敵を追散し外柵を奪返すも若はあしと大手
の門を八文字も押ひらかせ物とも續けと大薙刀を小脇よかひ込
群る寄手の真中へ真一文字も切て入前後左右の嫌ひあく當るを
さいわひ難立と瞬間も三十二人まで切て落しければ寄手も此
勢ひも辟易して鳥の海も向ふ者なく中を開きて通しけり是も續
きて家時が郎黨ども八方へ立別れ切立ければ流石も勇心官軍も
いろめき立て見えよけり此時權五郎景政は外柵を乗破り勝も乗
じて進みし處よ先手散々も崩潰して稍敗色を呈しければ大に怒
り斯まで賊兵を追入れ今ぞ大手を押破らんと思ひし時よ言甲斐

なく引色よなるのいと易からぬ事よこりいでと我働きを見ず
 きぞと真先よ馬乗抜て群がる賊と切倒す其さま瓜を切が如く無
 人境よ入たるよ似たり敵兵を追散し馬上よ扇を打揚て方招
 く其有様勇まじかりし事共なり其時鳥の海彌三郎の此勇猛を打
 詠め斯る敵を捨置時の始終味方よ損多かりいてく一矢よ射殺し
 吳んと四人張の弓よ十五束三伏の矢を取添て陣頭よ顯れ出大音
 よ呼りけるの是の當城の大將清原家衡の老臣よさる者有と聞
 へたる鳥海彌三郎家時なり此矢一筋受て冥途の土産よせよと言
 もあへす弓よ矢注ひ進みよる景政莞爾と打笑ひ我は鎌倉權五郎
 景政なり汝が矢先の請留見すべし若射損する其時は汝が首の我
 手乃下よ落へきぞいさゝ爰を射よかしと真向よ成て進來れば鳥
 の海のしぼし引詰射外したらの末代までの恥辱ぞと八幡神を祈
 念ひて切て放せば矢の長鳴しで景政が胃の右のまびさし上りを

射通し眼の中よ鐵と射込たり如何なる剛の者なりとも堪ゆへき
 よあらさるよ景政馬を横さまよ乗廻らしいかよ鳥の海返し矢
 一筋參らせん請て見よやと胃の矢をは折かけて白木の弓よ大脇
 股を引注ひ打倒さんとしてけれの鳥の海は是を見て大よ驚き扱
 も凄まじき英雄もある者かを我矢先よ掛りし者未曾堪へし者を
 見すこの鬼神よて人よはあらじと馬を返して鼠の如く逃去たり
 權五郎大音あげ家時始めの詞よ似ず臆病至極と追かくる其内よ
 鳥の海に城中よ隠入れれば三百余人の者共の皆散るよ逃去ける
 已よして柵中よの敵一人も有ざれの景政は大手の門よ馬を立大
 音揚て言けるは凡勇士の禮儀ありいかよ鳥の海武士の作法を破
 たる卑怯未練の働きするは命惜きやいかよぞや景政の尋常よ矢
 を受たり其答禮の有べきよ出遇て共よ勝負を決すべしと呼と叫
 と城中は闐然として音もあし此時父の景成は遙後陣よ有けるが

綱子景政重傷を受しと聞べしかば早速馬馳來り如何も景政汝
 尤も重傷なりしは虎口を退くべし敵を呼とも出のせじ無態よ
 退去を鞠むれども景政更も承諾せず何様仰のある逆も此柵中
 退くまじと馬を扣て動かざるよはや日も暮も近けれの將軍より
 下知ありて景政柵を乗取たるの今日第一の軍功なり已日晡よ
 近けれのト先柵中を退きて明日大軍を以て圍むべしと使者頻
 なりけれバ父景成は畏まり候と多請すれど景政更も多請せず今
 朝より血戦して取固めたる此柵を無下よ引揚がたきのみか鳥の
 海と言を番ひ矢を受留て候への其の矢を答射せぬ中へ決して引
 取申まじ明日も鳥の海か首を持參の其上よて將軍へ謁見をこ
 り願べし左もなき限の陣へは再ひ參申さじと言放バ使者も膠
 なく引返し將軍へ委細よ言上してければ將軍大氣遣玉ひ兎も
 角もして呼返すべじとありければ數度の使を立られたり夜も成

の刻も及びし頃又もや使の來りけれの景政心も思ふやうは意
 のは答も面倒なり又父の諫もむづかしければ此所を隠忍ふべし
 と敵陣の柵際も身を潜てありけるを諸人更も知らざりし父景成
 の景政の風と見へず成ければ扱の多本陣へ退たりと安堵して士
 卒二百余人を引連て本陣へ歸ける權五郎景政の跡も残て矢を抜
 んよも胃と眼よ射通したれば面倒なりと折かけて夜の時るをぞ
 待たりける

景政家時を討つ事

斯て其夜も曉近く成けるも秩父十郎武綱三浦平太夫爲次は左右
 の虎口よ在なから昨日の合戦よ小勢の景政よ劣りたるを遺憾よ
 思ひ夜の横雲の頃よりして兵を出し柵を取らんと押寄る大手の
 方の鎌倉權太夫景成二百余人軍奉行大宅太郎光房三百余人加勢
 とあて加ひりたり斯て合戦始まりたれと權五郎景政更も見へず

將軍を始父景成景成大氣遣遣ひ御方の諸軍諸軍を問尋問尋ぬれと更更は影影さへ見えざりぬ宜宜なるかな景政景政の是非是非鳥の海を討取討取て昨日昨日の意趣意趣を晴晴さんと思ふよぞ御方御方を隠隠て唯一騎唯一騎柵際柵際を彼彼なた此方此方と打廻打廻り狙狙ふといへども鳥の海鳥の海の昨日昨日の景政景政か勇猛勇猛な舌舌とふるふて恐怖恐怖れ嘗嘗て出遇出遇す唯唯高櫓高櫓を打昇打昇て四方四方の守を下知下知なしつ、虎口虎口々々を巡視巡視すれに又影又影さへも見見えずありぬ權大夫權大夫景成景成は景政景政か見えざるゆへ扱扱ひ討死討死せしからん我老我老の身の何何までか命命を惜惜み我子我子は後生後生存存らえて世世よあらんや討死討死して悴悴れ追付追付ころ増増ならめと手勢手勢二百余人二百余人を引卒引卒えて大手大手の門へ押寄押寄たり備備仗備仗助兼助兼大宅大宅光房光房兩人兩人も同く大手大手の「高櫓高櫓の下へ」と押詰押詰けれとも城兵城兵の矢を射出射出すのみ會會て城外城外へ打出打出ざれば助兼助兼光房光房其場其場とゆるめす頻頻は下知下知して人數人數を進め既既は堀際堀際に押付押付て乗入乗入んとする時時は光房光房如何如何したりけん將軍將軍より拜領拜領の采配采配を腕腕ぬき紐紐の空解空解より風と氷面氷面へ遣遣

しける光房光房無念無念限限なく直直は弓弓の弾弾を以以て此采配此采配をかけ留留んとし
てければ城中城中より之之を見て雨雨より繁繁く射掛射掛ければ其危其危き事事譬譬る
よ物物あし今や光房光房賊矢賊矢の爲爲に討死討死とこり見見ければ備備仗備仗助兼助兼驚驚き
見つ、馳馳來來りいかよ光房光房此所此所に居居玉玉ふは尤尤も危危き事事よこり是非
よ及及はず其采配其采配を拾玉拾玉へと諫諫けれは光房光房大音大音みて將軍將軍より拜領拜領
の采配采配を落落して其儘其儘打捨打捨おかんや爰爰は死死すとも夫夫まてあり拾拾ひ
取取て歸歸りかたしと賊矢賊矢を恐れず悠悠々と采配采配を掲掲上上ケ馬馬よ打乗打乗
本陣本陣へ引返引返ぬ其勇膽其勇膽と君恩君恩を重重ずる忠義忠義の心顯心顯れて看看る人之人之を
感感じける諸手諸手の攻戰攻戰勵勵しき中中に殊殊に勵勵しき秩父武綱秩父武綱三千余人三千余人を
三隊三隊に分分ち無二無三無二無三に押破押破りて是非是非は城へ乗入乗入らんと進進たり是
の昨日昨日の合戦合戦に權五郎景政權五郎景政は軍功軍功の劣劣たるを無念無念と思思ひ居居なれ
は討討ども射射れども物物ともせず既既は此柵此柵一重一重を押破押破りて籠入籠入たり
城中城中にハすはや搦手搦手の戦戦ひ急急あるぞと以以ての外の外は騒動騒動せしかり

家衝下知して此處を破られて、城守尤難かるへし寄手の足を撓させず討て出て追散せ鳥の海は居ざるかあれ追出せと下知すれぬ彌三郎家時綾浪威の黒鎧は青漆の弓は二十四指たる鷹の羽の征矢を箴高は肩負黒鹿毛の馬は打勝り精兵五百余人を引率し城門を八文字は押開き喚て寄手は討て掛る十郎武綱之を見てすのや鳥の海か出たるぞ願所の敵手あり押取圍て遁すなと呼はりて三千余人を一手は合せ鳥の海か兵を其中は引包て攻戦ふ家時厚鉄の甲冑を着たれは太刀長刀も喪かす殊は無雙の勇士なり取圍れても事ともせず大太刀を真甲は指かざし向者の唯一刀は斬て落す看々屍の山を爲り寄手の兵も堪かね中を明てぞ通しけれの得りや應と八方は馳廻一場の力戦は三十余人を馬の左右は切倒れぬ此勢は城兵共鳥の海は引續て殺到しけるは寄手稍引色は見えれば武綱馬上は齒昨を爲し言甲斐なき者共かな賊の軍

の兵卒のみ今乗取たる此柵を奪返されては一世の恥辱死ねや死ねやと勵しき下知は寄手乃兵も死力を尽し一寸なりとも退かじと氣を勵まして戦へ共鳥の海は勇猛は當がたく既は柵を追出されんと見えたる所は何方は忍居たりけん權五郎景政は昨日の矢をば未拔ず折かけたる儘あれば黒糸威も緋威と變する計の轉紅栗毛の駒は一かく入れ鳥の海と見るよりも駄天走は走來り大音あげ如何はや鳥の海昨日以來汝を待と一晝夜宛も三秋の思ひなりき答射の一箭受て看よと百千雷の耳根はて轟く如く聞えければ鳥の海は大は驚き執念深き景政は太戦かふては叶ふまじと返答はも及ずして馬を返して逃走る景政は思詰たる敵なれば何かは以て猶豫すべき馬は逸物乗手の達者矢よ早く追絶る鳥の海は跡をも看返る暇なく既は城門へ乗入らんとする所を權五郎景政尙六七反も隔りて少し間遠と思ひしか一念凝たる一矢の答

射鞍坪より立上り切て放せし眼當違はず敵の上より首筋より血煙立
 て射付たり馬上よたまらず鳥の海撞と落ちてぞ死よけり此時合戦
 酣よて城邊更よ人あければ妨けする者あらざれし景政馬より飛
 下て鳥の海が首打落し太刀の先よ指貫き馬引寄て打乗て敵の方
 よ打向ひ大音あげ將軍義家公の郎黨鎌倉權太夫景成が嫡子權五
 郎景政賊中よて一人と恃たる鳥の海彌三郎が首とりて退くぞ仇
 を腹する人はなきやと城を睨て立たりしよ又近よる者のあらざ
 れば我陣中へ靜よと馬を戻して歸行ぬ寄手の軍兵是を見て一時
 よ勝鬨をあけて押詰る城中よは鳥の海か戦没せしよ落膽し怒よ
 城を離て一戦するより利を失ふことありもすれ唯堅く守るよ
 しかじと出たる軍兵尽く引退き城門を鎖し唯大石大木を投落し
 て防くのみ一人も出て戦ふ者もなし此時已よ日晡に及へし將軍
 下知を傳へ玉ひ揚貝と吹立たせ諸手の軍隊爰よ始めて休息しけ

る扱も權五郎景政の思ふ儘よ當の敵を討取景成の陣へ歸り父と
 共よ將軍の下知よよりて御本陣へ引揚て同じく休息したりけり
 景政の矢を拔取勇氣の事
 既よして官軍攻口を退ぞきて諸將帷幕よ集りける頃權五郎景政
 冑の矢を折掛て一身紅よ染なし家時か首を携さへ將軍の御前
 よ來りて言上しけるし昨夕御下知よより速かよ引揚謁見を乞奉
 るへきの迄鳥の海家時よ出遇斯眼中よ矢を請とめ即座よ射返し
 申さんと存せしよ汚き家時其場を逃退しまよ今朝まで所々よ忍
 居初めて家時よ出遇首取て候なり御下知を背き恐入候も勇士の
 意地一旦約せし言よ候へは今日よ至て本意を遂候ひき家時の首
 實檢願ひ奉ると差出せは將軍之を見給ひ扱も拔群の武功かな末
 代まで又有ましき勇猛なり兎角其矢を拔取へしとありければ權
 五郎坐席を見廻し誰か此矢を拔て玉われと兎のまよ仰向よ臥し

此の時敵從弟ありし三輔爲次進出某拔て參らせんと立上り此矢
 を抜んとせしけるは精兵の射たる矢よあれば胃の眞ひざの板
 を射ぬきて眼の上の骨は射掛鐵は眼中に入てあり爲次是を抜か
 んとするは引とも引とも抜とも能はず足よて胃を踏居て抜んとす
 る時景政差添の小刀を抜出し爲次を刺んとするよ爲次の飛退き
 此大は驚き邊の狂氣やし玉ひしと云ふよ景政答るやう儿り勇
 士は接するよの禮法の有者ぞ戰場よて手負て死するよ本望なり
 夫との違ひ胃を土足よ掛られては勇士乃恥は此上なし汝が如き
 武の法を知らざる愚人の刺殺し景政此よて切腹せんと大聲よて言
 ければ爲次大は驚怖是の近頃誤り入たり某は邊と親族なれば心
 易く思はより大は禮義を失なひたり免れと膝を屈兩手を伸
 此漸次此矢を抜とりたり斯る痛手を負ながら少しも屈せず爲次
 が無禮と怒りて斯の如きの舉動の武士の法とを言へけれ扱も寄



爲次過テ
勇士ノ念
ヲ引出ス

手の諸將士の七月三日より柵際まで日々合戦する者の城兵守を固めて出合ふ事のあるとあく遠矢を飛して能防ぎ已よ九月の下旬まで百日間の攻城は武衛家衝屈する色無き道理なれ城郭高く溝深く兵粟多く人衆し陥没すべき勢さまたし義家將軍情と思慮し玉ふは此回の合戦不意より興り近國の兵は集る者の兵糧は奥一國を仰くのみ官軍現兵三万余人到底兵糧は事欠てん況て長陣の其内の軍士の心區々よ亘内變なるとの保しがたかり左る事若も有時は敗北せんは眼前なり剩へ當年の戦争は農民耕耘を失ひたれば米粟平年より少なからむ今より嚴冬の時に至り大雪來る事あらば亦先年父君と貞任征伐の時の如く艱難するのみ功有べからずしかじ一ト先兵を収め國府より多勢を催はし糧米等も十分儲へ春よ到て再征せば却て功を成得べし且我今此を退かば家衡我を追返せしと自伐て驕逸し人和を失して民畔ん其時一舉

よ攻伐ば滅亡する事速かならんと計謀已よ決しければ諸將の面々を呼集め近日寒天よ到たれば此地の戦争甚だ難し一ト先軍勢を引返し春暖を待て再び征伐すべき如何ぞやとありければ權五郎景政列を進みて此義甚然るべからず斯まで取詰たる城兵を只今捨て歸陣せば賊の益々勢ひを得て近國の無頼者を囂聚し愈々多勢よ成ぬべし今一戦なし玉へ某先陣仕り是非々々城を乗取べしと申上れば將軍よ汝が詞道理のなきよあらねども此度の我よ聊か思慮あれば先々下知よ從がふべし家衡追撃すべければ汝後殿致すべし三浦爲次を加勢とせん是先陣よ勝たる第一の功ぞかしとて三浦爲次よ此事を命じ玉ふ左れば寛治三年十月朔日將軍歸陣の令を傳へ諸軍三万余人法を守りて次序を乱さず引退く城中よ家衡武衛是を見て評定して申けるの扱も不思議の事よこり官軍七月三日より城を圍て勝利多しさるよ兵を退くる事

心得ず一定糧米の乏しきよ因るならん追撃せんと下知すれば家
 衡が舅藤原千任進み出義家の良將なり無謀も退陣すべからず然
 るを設よ追撃せば敗を取る事必定あり此事決して止むべしとい
 ひけるよ家衡聞て否々然らず兵を盡くして城と出ば難戦なしと
 云かたし軍兵四五千を引率して引取る敵を追撃せば何條子細の
 有べきやと兵を下知して討出んとす其時權五郎景政の後殿と成
 て残りし故此体を見て大よ悦び旗一流と吹翻べし三浦爲次も後陣
 を爲しめ二百五十騎を鷹行よ備へて待掛たり城將家衡の三千人
 を引具えて大手の城門と押開かせ將軍乃退くを追撃して分捕せ
 よと呼りて馳來る權五郎景政是を見るよりも陣頭も進み出大
 音あげて呼りけるは是よ待受たるの鎌倉權五郎景政なり將軍
 の命を受て爰よ在と尤久し陣前も來りて我大刀を受へし若又降
 を乞ふらば一命の助け得さすべしと刀を抜して仁王立よ立たり

ける賊兵景政の二字を聞よりも大よ恐れて進み得ず家衡是を見
 るよりも心よ一つの疑團を生し僅の小勢を引率して其勇壯なる
 獨景政のみならず後陣の備も亦然り義家別よ謀事を以て我を誘
 ひ出すよあらずや進て過ちすべからず此儘引揚こり増ならめと
 空しく城へ引入て高樓より見物しぬ將軍恙なく三万余人と召具
 して國府へこり歸り玉ひぬ景政も城兵の何事をも成得ざるを知
 ものから静よ兵を引取る將軍よ鎮守府へ歸陣ありて後各國
 の軍勢を皆罷歸玉ふ時明春暖氣を待て後又々金澤城の賊徒と追
 討あるへきよつき其節馳參軍忠を勵むべき旨命じ玉ひける是よ
 於て國府の一時も無勢となり權五郎景政兼仗助兼大宅光房三浦
 爲次和田爲宗等之を警衛し其余の雜兵のみよして一千三百人ぞ
 残りけり

新羅三郎義光官を棄て奥州へ下向の事

夫兄弟は人倫の至親にして友手の情盡さずんのあるべからず舜
 帝の象は於る周公の管蔡に於る其至親の道を盡すと云ふべき乃
 み爰に義家將軍の弟は新羅三郎義光と云人あり即武田小笠原逸
 見佐竹松前等の先祖なり此時尙兵部丞に兼て大内の守
 護たりしが奥賊猖獗して義家攻めくみ玉ふと聞よりも吾故入
 道殿の卒去後の兄を父とし事しは遠く別れ奉りて朝夕如何よと
 思ひ煩ひしよ今かく戦地は苦勞し玉ひ殊は追討の心よ任せ玉
 のぬと手を束て安閑と傍觀してや居るへき急き我も發向して兄
 と辛苦を共よして賊と誅戮すべきなりと關白殿下迄屢願ひ玉へ
 ども義光兄の戰勞を分んより院の守護こり肝要あらめと曾て勅
 許のあらされば今のは是非なし官を棄て東奥へ出奔するよ如しと
 衛府の弦殿を解て殿中へ差置夜陰密に京都を忍ひ出づ從者は藤
 原末武季光屢瀧口季方只三人雜卒二十人を召連て其關は新羅明

神の室前へ奉幣しつゝ立去らんとする時又俗官豊原時秋息をば
 かりよ追來ぬ義光之を見るよりも扱は院の使にて下向を止め
 官を放棄する罪狀を問せ給ふよあらすらんあな心憂事よこりと
 胸打騒ぎて待付けるよ時秋跪つき申けるの今夜は館へ参りし處
 事の体常ならずかねく苦心し玉ふなる一義を思ひ立玉ふ事と推
 しよければ時秋もは供せんと歩跡を慕ふて是まで参り着ぬとの
 詞よ義光りの要なし我の兄弟の私情より公義を捨て逃走する身
 の傍邊の是とは事違り吳る同行の思止る事こりよけれと諭し玉
 へど聞入らず是非は歩供なしてんよ若も聽し玉のば忍て出羽へ
 下りなんと言ふ義光拒くは術なく同行をこり許しける抑時秋が
 かくまで義光よ心を傾むけたる故の時秋の父は時元とて無雙の
 笙の妙手あり家傳の秘曲よ大食調の入調曲と言ふ曲あり元より
 神仙の巧成せる妙曲とて時元これを吹毎よ天つ乙女も雲より降

り驚風をも舞しむるの音調なりしよ時元の死する時よ時秋の尙
 幼少よて有ければ義光此技よ巧よして時元の高弟よ子よて有し
 故其笙聲の妙なるはあきく時元よ劣らぬより家傳の秘曲を傳へ
 置て其身の空しく成よける時秋長じて遺業を繼ぎ名を世よ顯り
 すの技あれども彼相承の秘曲よ傳へ得ざるを悲しみて常よ義
 光よ從ひて他事なく物したりけるよ今や出羽よ下りては長き別
 れと成んかと餘波も惜く且の又此秘曲の世よ絶なんかと悲しみ
 て共よ戦地よ下り着よき時有ば傳授を得んと斯の相具したりし
 とかや扱も日數の重りて足柄山よ差かゝりぬ時秋のかゝる望の
 ある事よ更よ色にも出さねど義光つくく時秋か心中を察するよ
 年來世よも睦ましく往通たるのみならず今又斯る長途の憂と訪
 慰むるの徒よやあらじかの一曲を傳へざる事を歎て斯のするら
 めされと此地よ到るまで色よも見せぬ彼の試心奥羽の國へ具す

とても千軍万軍の倭徳中心融かよ争てか傳えん只且深志のある
 を相具往んといと心あし此て傳て都へ返さんと思への時秋を近
 つけては邊の胸中吾能く知れり隠さず明し玉ねかじさるを今日
 まて顔色よも出し玉のぬ痛ましきと誘詞よ時秋のいと嬉しけよ
 言出るの奇も其家よ生れ不幸よして父よ後れ相承の秘曲を傳え
 す悲みて尙余りあり年頃傳授給ひれかじと歎暮しぬる身の此曲
 を傳へ玉のらの君を師とし事へ進らせ奥羽の地まで供して命
 を戰場よ限すとも争か厭ひ申へきと最切なる有様なり義光聞て
 打傾き心中左こり思ひれたり今何とて惜むへきとて大食調の
 入調曲を傳へ剩へ時元が自筆なる笙の譜を取て附與しけるこ
 り優よやさましく見えよけり時秋の數年の宿望一時よ足て嬉ま
 更よ噓ふへき者なま即其夜の足柄山よ止宿して彌生の空の臘月
 よ彼妙曲を吹けれの心耳を澄ま肝膽を清して最有難く覺えけり

時秋落涙して閑居たり尙其秘事を終夜口授ありて曰ふ隨ふ爲ければ御邊は是より歸京し玉へとありければ時秋聞も敢ずこは思もよらずや唯何處までも一命限は御供申べしと思入て申ければ義光重ねて言はるゝの志淺からず悦ばしく思ふなれ去れども我も共み與羽へ下り死を共みし玉は、身の爲盡の爲よあらず尋父の此曲を吾も傳へ玉ひし此道を失なひざるが爲なり我今一回敵よ向はゞ生て歸る心いさし我死せハ天下も此曲を失ふへしと思ひし事あるを幸御邊の志の深切なるを悦て傳へたり然るも共も死するなら遂此曲世も絶えむ是尋父の素意も背き義光か志も亦徒よこり成へけれ此道學ハん其爲よ此地まては下りじと申さハ敵宥なからんや疾く歸洛し玉へと言を盡して論じければ時秋も理よ責られて落涙千行東西よこり別れけり斯て京師へ歸りて後愈妙技を極しかば宇治左府も是時秋を帥とし玉ひて其秘曲

をも傳へ玉ひけるとかんと或齊先生詩あり証とす

騷起寒官從遠征男兒赴戰豈期生還音向月吹

何曲中有友子無限聲

去る程よ二月廿九日鎮守府へこり着しけり頃ハ暖氣よ成ければ諸國の兵を徵べしと評定ありけるよ近日將軍不例よて惡寒發熱不食して時よ昏倒し玉への諸臣大よ驚き御保養をり鞠めける此拵拵よ新羅三郎殿下向ありしと披露しければ將軍大よ訝り玉ひ鬼よ角急き對面すへしと義光寢所へ通られて京都の次第云々よで勅許あきより己とを得ず官を棄て出奔して兄と戰苦を俱よせんと恐ひて下向せし由を語玉へば將軍大よ歎ひ玉ひ我汝と副將として賊を追討するならハ誅戮を廻すべからずと越方の物語よ春夜の殊よ短よ短を覺え共よ詰明し玉ひ日を經て將軍病の憐り玉ふより兵を諸國へ徵へきも兵糧こり第一なりと四方より糶米を

集めんため二百騎三百騎と所々へ差遣ありしかば國府も殘る兵卒連の百余人の過ざりける去る程は家衡の謀略才智の者なれば舍弟武衡舅藤原の千任其外一家の郎黨と集め家衡申出けるは我義家の舉動を察するは氣力昔年と大異あり今日の如くよし何如貞任の榮耀を征し得ると得んや去冬此地を歸陣して後諸國の兵を遣歸し手兵僅よ有と聞已は當春に至り再諸國の兵を徵集するの時も當り義家大病も係り其沙汰も其儘も過行ぬ然るも舍弟新羅三郎義光下向せしより又軍勢を催促せしか先糧米の不足より諸方よ之を徵さん爲使者を遣はし殘の兵士五六百人の過すと聞是其虛を搦の一時なり殊も新羅三郎も居合すること幸あり一所よ之を亡しなは家運の開くの眼前なり此機を失せず押詰なり勝利疑かひ有へからす如何は諸君心底包す申玉へと陳けれは武衡千任を始せして此義尤然るへしと評議一決して酒宴

を開き送は酔を尽し退散しぬ扱夫より諸方散去の軍兵を催促せしよ去年將軍の歸陣以後家衡の勢甚強盛よして義家將軍すら討滅するも能はずして歸陣有し上からの家衡武勇將軍の上よ出る者ならんと思誤り附従ふ者甚多し且將軍の不例且少勢なれは自然催促も應ずる者多く奥州羽州北越より兵を率て馳集る者都合五万余人とぞ聞えけれ是を分配して三道より鎮守府へ押寄する一陣の二万余人武衡是よ將として奥道より進み一陣の一萬七千余人家衡是よ將として上道より進み一陣は一万七千余人藤原千任之よ將として遊軍とす三隊合せ五万四千余人大海の潮の湧上るか如くよ所よを放火して押寄する此由鎮守府へ注進急ありけるは將軍の折節熱病も犯され玉ひけるが此注進と聞と均しく大は怒玉ひ憎き家衡か舉動かな我弓箭と執てより以來敵は内兜を見せたる事あし彼幾里程か柵を離れ來るころ是天我は勝を

授玉ふ所なりと軍兵を點檢あるも、織よ六百五十人より外はなし。殊は病の其爲は燕の發する時は當れの夢中も成玉ふの御症よて所謂今の痼病なれの士卒大に心を勞しぬされと將軍屈し玉はず。夫も下知を傳へ玉ふ大宅光任當年積て八十四才聊か老耄の様になく諸卒を諫め將軍不例よまします共新羅三郎殿大將たり鎌倉權五郎先鋒たり家衛か五万の大軍の恐るゝも足へからずと士卒を屬ます其内は敵近寄ぬと立騒き雜兵共の心よ逃去ける殘るは譜代の郎黨のみ織よ四百余人と成りよける將軍少しも屈し玉はず此鎮守府と賊の馬蹄よかけさしての未代までも源家の恥といふへきのみ急き出張して防戦せよと新羅三郎義光よ百五十騎を從ひしめ城より一里押出し奥道を守り武衛を防くへしと此陣代よの備仗大宅太郎光房を差添らる又城柵の木戸三十余町を出張して將軍の三男式部重義國は是則新田足利百五十騎よて備仗伴

次郎助兼を陣代よ差添らる又國府より一里半出張して四郎義忠を大將として鎌倉權五郎景政を陣代よ差添らる又鎮守府よ殘るの老臣大宅太夫光任和田左衛門爲宗雜兵合て三四十人のみよていと危く見えよけり是時將軍よは尙ほ不例よておのまければ後の事のいざしらず今や源家の滅亡と人々歎息したりける

將軍奇謀賊を追返す事

扱も權五郎景政の四郎義忠と共に國府へ馳歸り將軍よ謁きて言上しけるは賊大軍よして御方の防戦相叶はず三方共既よ破れて今のはや此所へ押來るべし速よ落させ給ふべし某御供致すべきたれ共國府の城を敵よ乗取れんと遺恨限なく候への某一人此處よ踏止り大手よ戦死すへし君よの一刻も早くは退去然るべしと息をはかりよ勸ければ大宅太夫光任進み出景政の一言潔よしといへ共足下查人戦死せし迎當城を賊よ踏荒されぬとの爲がた

し夫よ君の供して先途を護とる忠臣といふべし早事急
 候へバ景政を召連れ御退去あるべしと言上しければ義家將
 軍聞給ひ面々少しも氣遣するとかかれ此鎮守府の中へは敵壹人
 も入べからず當城も恙なく我も無事な落行て明朝の悉く敵を追
 拂ひてんとありければ列座の諸士大に危ぶみいかよ大將の命も
 もせよ百騎も足ぬ少勢もて賊の大軍を争か防き止むるの術あら
 んや將軍此ほど御不例もて熱氣の勵しくましませば彼囁語もあ
 らざるかと人々いと氣遣ける扱將軍に諸士も命し玉ひて城
 門を入文字押開かせ且家衛か押來らバかく流言せよかしと忍
 ひやかよ申合められ即時も馬よ召玉ひ城を退去ありければ御供
 よの大宅光任權五郎景政唯二人一里半余南の方觀音寺村も着暫
 く休息し玉ひげる此時御跡を慕ひて馳來る面々よは三浦爲次和
 田爲宗兼仗助兼大宅光房其外兵卒四五十人將軍御旗を立られ陣

を張居玉ふよ第一番も藤原清衡三百余人を引率し諸鎧を合せて
 馳來り將軍の御旗を見て即時も下馬し冑を脱て畏まり扱も此節
 家衛事國府を攻んと軍勢を催促するよし承たまひり兵を隼る隙
 も無く見兵のみを引連て參上せし先以御安泰の尊顔を拜志大
 悅仕りぬ追々手兵の來着仕らんと言上の間だよ千騎計諸鎧を合
 せて馳來る又清原具衡病死して養子太郎成衡も家衛出陣と聞と
 ひとしく一騎掛もて馳來たり御陣へ加り其外國府もて逃散たる
 兵卒もいつの程よか歸來り曉の頃をひよひ己も三千余人と成よ
 けり扱又家衛武衛の前日の合戦も十分の捷を得て勢も乘し鎮守
 府も押寄見ればこいかよ城門入文字も押開き静まり返りて人影
 なければ諸軍一同も之と性み定めて謀計あることならん迂濶も
 攻入敗北すな斯まで大勝の軍なれば緩々城内を探偵し明朝入城
 すへしとて城外へ陣を張り其夜は箒を多く焚せ巡邏を置いて夜襲

を防ぎ嚴守せしは家衡が陣中忽ち流言の生むける夫の何れが
 義家公の敵の空虛を伺ひて金澤の本城に馳向ひ出羽の武士共馳
 加り一時は乘取計略なりと下郎の性の多智よしして嘆きとして言
 離せの家衡聞て大に愕き敵我空虛を伺知りて若も襲撃するにあ
 らば陷いるとの眼前なり敵は居城を奪はれば此處を得たりと
 も更にも用なき事よこりまづ蒞田まで退きて兵を分て金澤を防せ
 其後鎮守府を乗取とも運きとよのあらずかまと直に下知を傳へ
 つ、蒞田の宮まで引退く蒞田は近き其頃ハ早日の出づる時あり
 けり斯る所は其後ろより白旗一流朝風ハ翻翻と吹靡せ一隊の兵
 士二千余人関の聲をぞ揚たりけるこの不思議よと見る儘は陣頭
 は顯のれ出たる一員の大將藤原清衡大音あげいかよ逆賊清原
 家衡汝が最期は今日なるぞ若降参をするならば一家の好みよ命
 の助けんと切て掛れば家衡の心得たりと士卒を下知し將軍より

の清衡よこり遺恨多けれ吾伎倆を見て逃走と廣言し関を揚て
 送し矢をぞ射かける掛る所は源氏の陣より大鎗矢一筋飛來て家
 衡が馬の前ある旗持の兵を射洞し跡ある武者の草摺掛て射切た
 り此矢の尙も激し去て大地へこり立たりければ家衡之を見て
 扱も鋭どき弓勢かちこの義家の外あるべからず其矢を取り寄せ
 矢束を見れば果して源義家と漆を以て記したりすの義家夜の内
 よ取て返し是よ來りて我を討んと謀るならん定めし前後は圍ま
 れなん左る時の叶ふまじいざ引退けと云程は俄に陣中騷動しけ
 れば西方の兵士大に氣を得て西山の小松の蔭より四郎義忠百五
 十人を引率し関を一聲揚と均しく遠矢を射かけて進來る此は續
 て次男義親三男義國新羅三郎義光皆々殘兵を集めて驅寄せれば
 四方八面皆白旗よさしもの家衡大に驚きすの義家の計策は陷た
 るぞ早々蒞田の宮は退き武衡と一手よ成て本城へ引取べしと士

卒をまとめて一散よこり引行けり義家將軍は未病の愈ざれ共少
 しも病苦を恐れ玉のず采麿を振て下知し玉ひすはや賊の敗軍す
 るぞ此圖を拔さず追討せよと下知あれば先陣よ進みし清衡眞先
 よ馬蒐出し家衡を討り此時ぞと下知すれば士卒何かの猶豫すべ
 き矢聲を掛て追驅る爰よ又鎌倉權五郎景政今日こり是非よ家
 衡を討取んと千駄栗毛の馬よ策打横合より馳抜て家衡目がけて
 追かけければ家衡が二萬余人八方よ散亂して自己の及よ貫ぬか
 れ道なき徑へ逃入て生捕るも多かりける又藤原の千任の兵の
 二万余人と聞へしかども多くの野武士山賊鳥合の勢よ有ければ
 此時如何ぞ堪ふべき第一番に崩立跡をも見ずして逃けるが皆々
 心易りして味方の武器を掠奪し或の馬を抄畧しければ此乱妨の
 制しがたく全軍大敗して四途路よ爲て家衡始蒔田宮へ引退く
 景政武勇家衡と勝負の事

去程よ家衡は將軍の計策よ陥入り大敗軍よて蒔田乃宮まで引退
 く時よ權五郎景政の乱軍の中よ家衡を討取へしと外の兵よの目
 も掛す多勢の中を押分て敵中深く入込みれり紛ふ方なき大將家
 衡紅の鎧直垂よ金の冑よ日月の前立打逸物の馬よ打乗たり景政
 跡より大音あけ如何よや大將やへき事ありさまで逃給ふ事か
 らんと聲掛ければ家衡は元來狐疑の人なれり若や味方よ援兵あり
 て勝利よ得たる者故よ士卒の斯こり言あらんと馬を留てありけ
 れり景政直よ追付て家衡汝見覺えあらん鳥の海の爲よ一眼よ爲
 たる景政なるり其首速よ我よ渡せと呼りつゝ太刀振閃めかし微
 塵よなれと打下せしに力あまりて馬乗すへらし家衡か膝の曲を
 切付たり家衡無雙の勇士なれば景政よいつたと睨み預て望める
 小冠者か幸ありと大刀抜かざし渡り合ふ一上一下實々虚々未勝
 負の決せざるよ家衡の郎黨驅隔て景政を追取圍で戦ふたり此時

傳仗助兼太郎光房兩人助來て前後より夾で切立る家衛は古今より
 秀る太刀の妙手受つ流つ戦ふ中景政進んで搦んとするを家衛横
 よ拂ひたれば甲の草摺三枚を切て落す景政疊掛て打太刀よ家衛
 の右の腕よ二ヶ所の傷を負せたり今や家衛討るべしと見る所よ
 郎黨百騎計押隔たれば物別して家衛は無事よ苅田の宮まで退け
 る景政助兼光房と一手よ成り味方を下知して追討せり官軍勝利
 十分よして分捕高名夥しく今日の戦ひよ家衛兵を失ふと一万人
 戦場より苅田まで武具馬具を捨たる事宛も草を敷たる如し殊よ
 千任の軍勢の野武士山賊等の爲よ亂妨せられて多く人數と失し
 となん機よ苅田の宮よ陣を立殘兵を引集めしよ休足して人馬
 の息を納たりける斯て義家將軍の思ふ圖よ賊を追退け國府へ再
 入り玉ひ清衛を呼せられ今日の武功拔群なりと賞譽ありけれ
 ば清衛拜伏してすける凡兵法の處よ乘ざるを善とすとすなれ

バ彼が恐怖よ乗して苅田の兵を追落さば如何あるべきやと伺ひ
 けれバ將軍我も左こり思ふなれと大將よの義光義親義國義忠の
 四人よ五郎景政次郎助兼太郎光房三浦爲次和田爲宗を差添へ清
 衛を先陣として軍兵凡四千人苅田の宮よ押寄せんと評議一決
 したりける扱家衛武衛千任の三賊將の苅田の宮よ引退殘兵を集
 めしかども皆戦ふべき氣力なく唯茫然として速かよ金澤え引込
 るこり上策ならんと評議未終ざるよ関の聲耳根よ起りしかば雜
 人共逸足出して逃退ば家衛も是非よ及はず皆一同よ金澤乃柵へ
 引入ける義家將軍は諸國の軍勢追々着到してけれ此大勝よ乘
 して直よ賊を誅滅せんと用意ありける處よ病氣再發し惡寒はげ
 しく瘧疾の如く又風寒の如く火よ惱玉ひて命も危く見え玉ふ故
 自身の出馬の叶玉のす去り迎敵集の兵士馳來る以上の空く罷遣
 すへきよ兼す依て將軍の代理として新羅三郎義光並よ公達三人

先陣より秩父十郎武綱鎌倉權太夫景成三浦平太夫爲次等二陣より清衡成衡總勢二万三千人荻田の宮よて手分して金澤の柵より押寄る且又家衡武衡の將軍の謀略より一驚を喫し遂に大敗と取しかの兎角出陣する時は不覺を取とま、多かり只此城と堅守して將軍の兵糧尽るを待よ如すと城兵と点檢するよ三万余人よ余りしかの先糧米を取入て四方の柵を堅固よ構へ守るを主として戦かはず官軍も是よは殆ど退屈しけるよ人數の日々よ馳加はり三万有余の大軍故山ともいはず野とも云はず都て陣營を布陳ぬりも二三里の其間の兵の巷と成よけり官軍敵を誘き出して討んと種々よ調略すれ共家國更よ出陣せず久陣の外他なけれの此よ彌退屈しぬ爰よ清原真衡の去年病死し養子成衡家跡を繼一が養父の死する遺言よ元來汝の母なる者の頼義君の息女なり去れの汝は故將軍よの縁なきよあらずかし扱家衡叛逆の其原因を尋れ

の我と吉彦殿の矛盾よ兆し其本たる我と秀武とは和睦して家衡獨恣睢を肆よし將軍よ向ひて弓箭よ及ぶ此身よ取て辨解しがたし故よ我此命をあからへて忠義を盡すへきあるよ如何せん今臨終の時よ及べり實よ遺恨限なし我死後よの汝我よ代て大功を立戰場よ命を捨て與よかし汝養子の事なれば吾よ對して義理多かり能吾一言を忘却せず二心を抱かず將軍よ事へよと言置て其夕方よ死去ぬ小太郎成衡元來直實の人なれば養父の遺言心魂よ徹し何卒家衡を討取て死者の心を慰さめんと其工夫より他念なかりしが此度官軍よ從て家衡を討取て希世の功を顯さんと屹度一計を案し出し先づ先陣の景政武綱爲次よも密よ之を評定し城中へ陽よ和順と云入れて其機よ應して家衡を討取へしと一決し使者よ以て申入けるは成衡よ於ての家衡武衡兩君との骨肉を分つよあらずといへ共父真衡よ在ては全叔姪の親あり然るよ僅

十の遺恨より透し敵となり刃を接ゆるよ到と退某が素懐よあら
 ず今より以來和協して水魚の交りを爲す可きあり某合夥するか
 らの清衛輩誰一人畔き申へきと口上尤丁寧なれ共家衛更よ之を
 信せず使者數回よ及びければ家衛兄弟漸よして心解扱別心な
 りまと和順の事の成就して密に城中へ來給へ對面して一家の好
 を全くし積鬱を散ぜんとの返答なれば小太郎成衡大よ悦び扱
 謀計成りしとて景政武綱爲次へも此事を傳へ家衛を討取て城中
 へ火を放たん夫を合圖よ大軍一同よ攻入給へと約定し勇壯ある
 諸代恩願の郎黨七十余人を擇出し下には何れも腹巻着し上よは
 常の衣服を粧ひ成衡も同じく腹巻せし上よ直垂穿て八月七日夜
 半ばかりよ柵門よ行か、れの客人ありと城中よの兼て用意も整
 ひ居れば柵門まで藤原千任出迎つ、透し禮儀の恭しく左右よ正
 しく居並びける成衡一同へ會釋しけるよ此時藤原千任の固より

奸智よ長これの只今海道殿の体と見るよ主従共よ子細有けよ見
 ゆるなり携へて油断すべからずと大音あげて呼びければ成衡元
 來氣早の大將事顯れぬと見てければ共よ同く大音揚我當城の内
 よして落命するの預ての覺悟今少し遅くんば事成就せし物を早
 くも千任よ見破られけるこり遺恨なれ言までもかく此成衡の家
 衛の如き逆賊不道よ與せんや謀て家衛兄弟を討上は將軍へ忠を
 顯し下の奥羽の民を安せんや事成さるの天なり命なり成衡が
 武勇の程を見よかして七十余人一時よ太刀を引抜て討て掛る千
 任の是を見るよりもこの叶ひしと館中へこり逃入たり卒然事の
 起去より騒動鼎の沸が如きも家衛類よ下知を傳へ千余人を二の
 木戸口え押出させ四面より引包み我討取んとひしめきたり此時
 早火を放てば御方の兵の集まるべきを取圍まれしよ其間なく
 と遺憾ある事よこり海道初七十余人全く死地よ陥りたれば切

とも討とも物ともせず縦横無盡に確立つ、二の木戸口より入りつひて一息ついて扣たり此時は退き出は出べきを海道は此大功を仕損じて生て御方の人々も對する面のあきりとて思切たる一期の接戦無二無三も押破らんと再ひ進みて駈向ふ實は佐藤嗣信兄弟の曾祖の程ころありけると後人之を評しけり此矢叫の音城外も聞えけれ共預て約束の火の手を待て是も應ずる者なきも權五郎景政の此矢叫を聞くとひとしくすは海道の仕損じたるぞ此騒動も付込て城も乗やと千駄栗毛の馬を走せ我も續けと呼りて直も二の柵へ乗入て共も火をこり掛たりける此火所々も燃移りければ秩父十郎武綱三浦平太夫爲次和田左工門爲宗は我先も乗入んするもの、大手の柵門狭して只込合て居たりけり此時城内も藤原千任五百余騎を指揮して横合より不意も出成衡を真中も打圍む海道も千變万化と秘術を盡して働らけとも多勢も無勢

の事なれの七十人の郎黨の彼處此處まで討取れ残るは海道只一人數ヶ處手創を被れとも猶も撓ます接戦すかゝる所へ權五郎景政は驅來て海道と救いんと爲けるも小太郎屹度之を見て景政吾已も重傷を負て存命已も叶ひかたかり敵も首を取れなり一家一門の恥辱なり御邊速かよ我首討て死骸と共も御方へ引取玉のれとて持たる太刀を取直じ咽を貫ぬき偃臥たり景政大も稱歎し勇士の一言道理も當れり何逆無下も爲べきぞと海道も死骸を背負ひ城内へ入しゝるしよとて敵の首を太刀も貫ぬき東兵の頃御方の陣へ歸りけり賊運未盡さるか所々の放火も消盡て尙堅守乃勢ありて依然とこりは見えよけり

官軍失火賊兵夜討の事
金澤の柵賊勢甚た強く陥没すへき休を見す糶米れ畜へ澤山よし
て大將も亦武勇もあるなれの合戦常も牛角よしして何時果へきと

も知れざるも當年の米穀不熟よして兵糧の運漕よ困窮しければ
 將軍鎮守府は在て諸方よ下知を傳へ玉ひ糧米催促し玉ふより纒
 よ飢よ及ばざるのみ儲蓄の事の思ひもよらすいと軍勢の振いど
 るよ今年何時よりも嚴寒よして十月の半より雪降出し晴天と
 ては少なるよ十一月よ到て益々風荒雪落て士卒指を墮すの苦
 みなれ義光初公達方の大よ寒威よ惱み玉ひ合戦の事の姑く置
 き日々宗徒の者を集め焼火のみして凌ぎ玉へり本陣已よ斯の如
 くなれれ其餘の陣營の自然嚴備よ怠りけるよ十一月十二日夜の
 亥の刻とも思ふ頃某の陣よ失火えて一時よ燃揚り忽ち餘營よ
 延焼し殊よ夜風の強けれ炎焔四方よ吹散て廿四營の小屋々々
 よ一時よ火勢の延のへて已よ本陣の裏の屋よ火の移るべき形勢
 なれば諸陣の者共駭りて敵乃夜襲と駭き惶て馬よ太刀よと騒動
 する中よ權五郎景政の直よ鎧を一着なし少も騒がず走り出四方

を屹と見渡して否敵の夜襲よあらざるぞ心を定めて消防せよ
 と下知する者の風力勵しく手段も中々盡果たり此時城中よ賊
 將家衡之を見てすいや味方の勝利の時ぞ此圖を拔さず出戦せよ
 と俄よ兵よ三隊よ分ち第一陣は五千余騎藤原千任之よ將たり二
 陣も同じく五千余騎武衡之よ將たり三陣も同じく五千余騎惣大
 將家衡之よ將たり都合一万五千余人又五千騎を引殘して城の要
 害を守らせ鯨波一聲三面の城門をさつと押開かせ渦巻如く突出
 せり此時官軍の火勢よ膽を奪はれて誰一人も防戦せんとする者
 なく既よ潰崩すべき勢ひなるよ權五郎景政手兵二百五十騎父景
 成と諸ともよ第一陣よ乗出す續て秩父十郎武綱三浦平太夫爲次
 一手よ成て三千余人城兵と関の聲をぞ合せけり義光の本陣よ
 兼仗伴次郎助兼大宅太郎光房麾下の壯士を下知し陣屋の消防の
 捨て置て賊と打破りて追退けよと聲よからして指揮したり續て三

郎義光を始めとて三公達も馬は打乗旗の手立て探出し諸陣の
 火光を後にして士卒と下知して進ける景政武綱の先途に進み馬
 を左右に乘達士卒を率て賊將千任が五千の兵を左右より喚叫て
 突て入り縦横無盡はかけ立たり今夜景政の軍振平時と大に剛脆
 の異なる譯は三千余石の御方の糧米若も火勢の移りなば一日の
 對陣とてても叶はずと是のみ心は掛りける其故なりと看官察し玉
 ふへし爰は秩父武綱は常景政は劣とも不意の夜戦は功名して
 武名を揚んと千任の備を突開きて無二無三は旗本まで割て入是
 非大將を組留んと闇處を便に紛れ入千任が馬前は近付ければす
 りや大將ごさんかれと駈寄ながら横合は無手とこりは引搦たり
 千任の驚きよもや敵よあるまじと大音あげ千任なるぞ鹿忽す
 など聲掛ければ武綱悦び蛙の口ゆへ呑る、譬秩父十郎武綱なる
 ぞさいふ千任ぞ望みかれと馬より忽引落し既討んとする所よ

千任の下より大音あげ搦たる敵の秩父十郎武綱なるう皆折合て
 討取れや味方のなきかと呼りければ武者十五六騎四方より打
 重りて武綱を突倒し難なく千任の立揚り直馬は打乗て其一字
 よ城中へこり逃入たり此時武綱口惜きと限なく搦たる敵を取逃
 し怒る獅子奮迅當るを幸ひ難倒すも跡は引添ふ御方のあし
 手疵も四ヶ所負たれば敵中よ紛れ居機を見て御方と一ツは成敵
 を追てぞ走行く大將己よ逃たれば此手の士卒の七裂八裁皆散々
 よ引退ぞく家衝武衝是を見て扱ひ千任は敗走したり奇手の失火
 を機となして出戦したる甲斐なきも設て本城と乗取れての
 悔ても益な一城内よ退きて守るよ如かずと上貝吹せて引入たり
 斯て官軍の十分勝利の得たれども消防するもの一人もあらで有
 けれの一里四方よ連ねたる陣屋は都て焼失し剩へ三千余石は糠
 米の不殘煙と成よけり是よ於て義光諸將と評議して一先陣陣し

後日の合戦の將軍の御下知を待ころよからんと夜あけて軍士を
點檢し鎮守府へこり陣陣しぬ是より賊徒の大を驕り兩度まで將
軍の軍勢を追返したる上からの武勇に於て天下を恐るゝ所あ
じと益兵を催促し糧米を畜へ猛威を奮ひける其年も已む暮て寛
治五年の春を迎へける此合戦已む三年の日月を経て尙賊勢の盛
かる今の奥羽兩國を敵する者のあかりけり

義家將軍病氣全愈の事

并 金澤城へ發向の事

己に新春に至りぬれば太平の時なりせば万民春を祝賀して喜ひ
遇ふて年禮を舉行ふべき節なるを奥羽の二國の兵戰の爲唯其形
のみよして寂寥として有るのみか將軍の木例稍重り絶食よあり
しければ心元なき限よて義光始公達郎從唯周章して見えよける
中よ大宅光任の將軍の寢所よ入大に諫て申けるは角籠らせ玉ふ

は病を愛させ玉ふに似たれどもまだは老屈と申よもいはず御
定業の是非よ及はず縦ひは命のありすとも武門の御志ざしの立
ざればは残念よこり思すらめ先立出玉ひて年始の賀を受玉ひ
諸士の心も振ふからんいかよしか爲玉はずやと進め申せば將軍
尤も同意ありては身を清め出座し玉ひ前時義光へ貸置玉ひたる
源氏重代の寶刀鬼切髭切を取戻し之を帯して出座し玉ひしよ不
思議や今まで大病よ臥し玉ひしも立所よ拭ひ取たる如く平愈あ
りて氣色尤快然たり公達初臣下の喜び又言語よ述がたし舉て祝
賀し奉り万歳をこり歌ひける是よ於て寛治五年の春も稍暮頃
家衛追討の出馬と定め玉ひけるよ當年は去秋の收穫心よ任せず
殊も戦争よ多くの糧米を費し他國よ運漕せしむるも自然不足を
補ふより奥羽の民の菜色多し今暫くよして秋作の實るを待て糧
米を儲へ兵を徴て發向あるべしと秋まで出軍延引ありしかば家

衛いよく暴威を逞よくし鎮守府を攻んが將北國より出張して越後
 加賀能登の國々を徇へべきか又中山道を發向し帝都をや襲ひ
 んと評定區々なる由の間諜の歸來ていふのみか人民も亦是等の
 噂を爲しけるより奥州の農商一同も此國は故頼義公以來其仁
 政を蒙りて生計を保てる身あれば此時よこり報効を圖らすんば
 有べからじりも逆賊の誅滅し難きは官軍糧米の不足よれり我
 ら方の限を蓋し献米するこりよからんと評定此よ一決して我も
 らも兵糧を運漕怠るとなれば今は鎮守府の倉粟も入かね
 て皆露積去て山の如く亦是阜の如くなれば已に糧食の調ひたり
 とて出陣の用意よ及びけり諸國の武士召よ應じて馳來るもの三
 万余人三隊よ分け第一陣の秩父十郎武綱鎌倉權太夫景成同權五
 郎政景三浦平太夫爲次又大將を三人よ分ちて一方は義家將軍一
 方は新羅三郎義光一方は藤原清衡と定められ夫々よ軍勢と点檢



義家自危ヲ智ル

し號令嚴明部伍整肅糧仗十分に運送して出羽の國へと發向ある
 逆賊家衡是を聞將軍病平愈して攻來る上からの糧米足て兵多か
 らん定めて我柵を乗取のみよ心を注ぎ却て用心少かるべし空
 しく敵を此柵よ待て戦ふの謀計なきよ似たり中途よ不意を討な
 らば勝利有る事疑なしと精兵選びて三百騎外よ五人よ一人つゝ
 頭取を六十騎附て雜人は一人も是を雜へす歩行士よ腰付の辨當
 を持たせ上下合て五百余人是を藤原千任よ授け夜中よ城よ出さ
 せて山よ添ひて數里を奔らせ材木深き處ろよ伏兵し將軍通行の
 其時よ麾下を討んと伺ひける扱も將軍よは角どのしらず此處へ
 通行ある遙か此方よ馬とめ玉ひ扱も不思議や今彼林の上を過る
 鴻鴈の行を乱すの如何ぞや吾嘗て孫吳の兵法を學ばんと大江匡
 房よ師とし事へて聞たるよ鴻鴈行を乱る時の其下よ伏ありと今
 其言を驗するよ足と諸軍の行列を留め清衡を召て彼處の林の内

よ敵の伏兵あると覺ゆるぞ急ぎ馳向て鏖殺すへしとありければ
 即二千余人を率て押掛り關の聲を揚林樹よ火を放ちて探索しけ
 れば千任の一軍不意を討れ大よ駭ろき我先よと逃れ出るぞ快よ
 き清衡追かけ追詰て首數百をぞ討取ける諸軍勢將軍の能兵法を
 知り玉ふとを感しけり既よして金澤の柵よ近付ま、諸軍を三方
 よ押分て十重廿重よ取圍み關の聲を揚ければ城中よも同じく關
 をぞ合せけり

金澤城攻の事

并勇怯座席の事

斯て金澤よの家衡武衛武勇を振ひて固守り唯日々の小戦よ勝負
 も更よ分たされ人々退屈したりける將軍兵士を獎勵せんよ
 應の座席を勇怯二ツよ分ち玉ひて軍後の接遇を定めらる勇座よ
 列なる人々よの山海の珍味を盡して酒を賜り怯座よ列なる人々

よは逆の下座よ是を座せしめ白粥のみを賜りて酒の固よ賜
 いらず斯して兵士よ恥をしらしめけれの人々勇席よ列ならんと
 競ひけるとぞ宣よしぞ扱又城中よ此度は敵味方是非安否を
 究めんと思ひ込てぞ守るなる又官軍は逆徒追討の趣意を立んと
 する中よも權五郎景政の堀側よ押詰て橋とかざし大勢の人歩を
 驅集め堤と急よ築き立共蔭よ人馬を休へて又更よ埋草を運ひて
 堀を埋め掛晝夜油断なく漸々よ半餘を埋立て稍往來の成を考へ
 景政自眞先よ進士卒を下知して堀下へをし詰是非よ乗破らんと
 願めども切岸高く堀深く容易よ登る事を得ず攻倦んでぞ見えな
 れども猶懲すまよ乗破らん晝夜十余日更よ攻口を弛めされの城
 中よも此處は殊に大事よ守りけり秩父十郎武綱三浦平太夫爲次
 和田左衛門爲宗も景政よ劣らす各攻太鼓を打鳴し長梯子よ掛埋
 草を以て堀を埋め攻破らんと欲すれども城中よも家衛武衛千任

の三將迭よ心を合せつ、晝夜を分たす城壘巡視よ油断なけれの
 又諸共よ退屈してう見えよける將軍も稍軍略よ尽玉ひ只誘き出
 して討取の外良策なしとおほせども城中出戦して敗走するも懲
 たまけん只堅守の術を尽すのみ墓々しき軍のなかりしかば將軍
 軍士の懈惰を恐れ玉ひ彼勇怯の兩座を構へ此よ軍士を鼓舞し玉
 ひし事なりと彼勇座を占むる者第一座の鎌倉權五郎景政日々
 下りし事はなし第二座よりの秩父十郎武綱三浦平太夫爲次和田
 左衛門爲定三浦爲清備仗助兼大宅光房義光の從臣腰秀方迭よ上
 下の別はあれ日よ勇席よ列することを缺事なし其外の人々の今
 日は勇席よ列するかと視れ明日の怯席よ列し又定りも無かり
 けるよ奥州末割の領主末割四郎惟弘の大身よして有福なれば甲
 冑武器馬具の華麗なるよ似もつかす日よ怯席よ着ければ獨心よ
 口惜く我勇怯席の命出てし後未曾て一回も勇席よ座したる事な

く日よ怯席の第一座たり我性來臨病なりといへとも三十日間必
 怯席の第一座を踏事遺憾の業よこり今にも一戦の有ならぬ我先
 陣よ乘起て人の耳目を驚かす武功を立勇席を占て恥辱を雪かん
 と思ひ詰たる折柄よ城中より使者來り將軍久陣よ在ますを以て
 倅然たるへし就ての家衝か近士よ夜又龜次と申者太刀打力量
 相應の者よて候將軍よりも力士一人差出され場中よ於て剛打の
 勝負あらせんよ能一興よて候んんと申越けれぬ將軍聞受たる
 旨返答ありて後諸將を集め凡剛打の事は古よりありといへ共匹
 夫の業よて大將たる者の出べき事よあらざさり迎負たるは恥辱
 よ非ざと言のざるを得ず且彼が此力士を出す所以の其勝負よ依
 て合戦の地を爲んと思ふなり諸將合戦の用意尤肝要あり況や敵
 よ對して勝負を試みんと言來る以上の容易の力士よあらざる
 べし味方の兵卒の中其任よ當る者と撰ひ差出し勝負を決せさす

べきよし下知ありたれば權五郎景政進み出臣か一族縣小四郎と
 云者の歩徒武者よ縣の鬼竹と稱する應分力士是あり身体骨格の
 臣と均しといへ共其力量よ至ての臣の上よ出ると万々なり且太
 刀討難刀の妙手よて心膽尤も勇壯なり御一覽の上御決定然るべ
 きかと言上しければ將軍喜悅ありて明日其者勝て得ば我馬廻の
 力士よ申付へければ万事よきよ計ろふべし當家の面目なりとあ
 りければ景政拜伏して臣鬼竹よ於ては其勝べきと保ずる上は必
 御氣遣ひあるべからざとて己よ鬼竹と定りける扱も明日卯の半
 刻秋も季なる冬の隣毎よ晴天打續き日影目パゆき朝天よ場所ば
 大手乃柵外の廣き所と相定城中よは櫓の窓押開きて大將初見物
 す下よの精兵凡三千許いと嚴重よ警固せり又官軍の陣よの小高
 き所を將軍の座と定め是よ列なる面々の義光其外三公達其余の
 諸將列座せり鎌倉權太夫景成二百五十騎秩父十郎武綱三千余人

前後左右を守護して非常を警め若も軍の始まらぬ打破らんと扣へたり斯る處も大手の木戸を開かせて顯はれ出たる一人の武者是家衡の頼み切たる夜又龜次六尺有余の大兵よて双眼は星の如く一身總て熊よ似たり銀小寶を赤糸よて纏くるみたる鐘よ銀の一枚張の冑よ板佩立を附け一丈許の手鉾と振かたげて出たる様の天晴一箇の勇猛武士鬼か人かと怪むばかりいと退しく見えたりける又源氏の陣頭より馳出す一箇の武者黒革威の彼處此處破れたるよ桃形の冑を着大長刀を引るばめて躍り出たる其様の亦是一人の豪傑とこり見えたりける己よ双方立向ひ送よ名乗て式禮し稍勝負こり始まりければ御方も敵も片唾を吞て見物す此の長刀彼の鉾送よ隙を見合て討ひ拂ひ拂への討飛鳥の如く翔廻り一處一實手練の秘術を此よ極め一身の精神を此よ勵まし未勝負の決せぬ所よ鬼竹いらつて打大刀よ龜澤の鉾を打落せり龜次直

よ太刀引拔又一場の勝負と此よ開きたり此時よ當ての双方の見物手よ汗握て目もいなさずや、勝負の決せぬよ鬼竹一聲大喝し掛たる長刀龜次は受得す胸を拂て切込みたれば何かの以てたまるへき馬より真逆様よ落ければ鬼竹透さす馬より飛下り押へて首を打落し太刀よ貫き又長刀を脇插み大音めけ是の義家將軍譜の郎黨時よ依ては鬼竹と名乗ども其實名は鎌倉權五郎景政是なりかゝる小兒の藏れせんより家衡出よいかよぞやと呼りたり源氏の方の弦を叩き箴を打て同音よ勝鬨をこり揚ければ家衡怒よ堪かねて憎き景政の大言かな彼打留よと下知すれい心得たりと出羽に住人沼田三郎先手とし屈強の兵士五百余騎武衡を大將として鬨を作て突出せり將軍遙よ是よ見て景政を討すな救へと下知ま玉への豫て警固の權太夫景成手勢二百五十騎を率て旋風の發するか如く馳出せり此よ續きて秩父十郎三千余騎三浦和田

の面々我劣らしと馬の首を引向て景政を討せじと曳々聲よて進
 む中よ唯見る一箇の武者喙木鳥色の鎧よ紅の總角を結ひ一かと
 目立美麗の出立異一文字よ敵陣へ馳掛る御方も敵も天晴大剛の
 武者振かな何人なりやと是れを見れば是なん毎日怯席首座を持
 切る未割四郎惟弘なり賦性の臆病彼怯席の首座よて諸人の嘲
 を受るのみか迷ふ所領を失いんと家臣の深く心痛して或日老臣
 栗原莊司主人を諫て言ける殿よ奥州國內よて誰よ押れぬ家
 勢のみか數代武勇の血統よて故殿は故將軍貞任征伐の時よ従ひ
 給ひ武功多くおのし名高き御人の家跡を受玉ひ今日々よ勇怯の
 座席争ふ其間よ未一日も勇席よ即玉ふと能はず御父祖へ對して
 殊よ不孝よおのさずやと心の限陳けれの惟弘恥て泪を流し我武
 家よ生れ父祖の名を汚し子孫よ對していと恥かし討死せんと思
 ひあば天魔といへとも何ぞ恐れん今よも賊の討出なれ無二無三

よ馳入りて討死するよりほかりなしと此日美食を調理せしめ飯
 かき居て飽まで食ひ殊よ酒さへ多く飲て後剛打見物よ出けるよ
 今此一戦の起しより是此時と家人一騎も引具さず眼を塞き一文
 字よ武術か陣頭よ馳掛れ何よも武功の勇者なりと御方も敵も
 成じけるの亦後世の福島正則の從臣別所民部の卑怯あると共に
 一箇の咲柄ところ言べけれ扱も惟弘花々しき出立して武術の陣
 頭へ馳掛れば武術是を吃と見て官軍中の大強者近よせての叶は
 じと重藤の弓を弦食しめ大鴈股を打注へ馬を乗達て引絞り狙を
 定めて切て放ての過たず四郎惟弘が首の骨を射切たり四郎の堪
 へず馬より下よ落けれの首をらんと近よる敵を秩父十郎義綱は
 御味方を討れて大よ怒り三千余騎を一隊よ合せ平押よ押寄たり
 武綱景成景政の三方より夾撃せんと進來たるを家衡見て此軍兵
 よ取圍れては味方の死傷多からんと陣を倒さまよして城門へ引

入ければ殘兵繼よ打取て勝鬨と共陣所へ引揚ける斯て將軍の
 景政を呼出され誠よ日本第一の勇士なりとて副領の鎧を賜り陣
 中よ酒宴をこころの開かれける後末割四郎の屍の家人共引取ける
 よいと性しきり今朝食したる物の咽の疵より出ける由將軍是を
 聞玉ひ涙を流し實我國の恥を知り義又富國といふへけれ斯る事
 と我向きよ知らば彼よ説諭し細徒と爲してながらへしめんよ
 遺憾のよと思ふなり天性の臆病より既死を決せし心の恐れ食
 物胃中よ納まらず消化の効なき物よこり然りといへ共武門の義
 を知り討死するこり不便あり嫡子へ領知を賜り大功討死四郎
 惟弘が跡式との判物をぞ添られける是より暫く軍もなくてあり
 けるよ一日賊城よて樞の狭間押開き寄手の大將義家又物申さん
 汝が父伊豫守頼義安部貞任宗任よ討立られ身の寄所と失ひて我
 父故將軍武則君を頼來り武則君の力よ因て織は敵を平けし其大

徳を荷ひたるは何時よか忘するべき然るを義家虎狼の野心を抱
 き刃を恩人の兒よ傳まんとす不義不道の義家皇天豈之を罰せざ
 やらんや夫よ従ふ諸國の武士希い今より心を翻し我家衛武
 衛の兩君よ奉事せば永く子孫洪福の基を開ん惑を解て降参せず
 やと大音よ呼ければ源氏の軍兵之を聞て齒咋と爲して憎き賊徒
 の悪言かな此上の只無能攻よ攻掛れと講きければ義家下知して
 彼の御方を怒らせて無能の合戦を仕掛させ夫よ乗じて一勝を占
 んとするの拙策なり攻るの決して無用の事なりと皆々兵を引ま
 とめて本陣へこり集りけり

義家城將の乞を許さる事

扱も寄手の軍兵の一旦退き休息しけるが樞五郎景政十郎武綱等
 氣をいらち是非よ今日こり城を乗破らんと又々軍兵を進みひし
 くと堀際へ押詰たり爰よ清原武衡は情々城中の形勢を察するよ

此度の合戦勝敗未定まらずといへ共始終を押せば滅亡に至らん
 且藤原千任執權して依怙の沙汰多かり此又城中の一害あれば縦
 滅亡に至ざるも到底勝を得べからずと心よ疑を生ぜし處よ家衡
 の又只官軍の兵糧の繼ぬのみと恃として自己の糧米の繼ざる事
 を思惟せざりしよ己よ冬天よ到れども寄手退く氣色なく依然と
 して舊の如く其圍の彌堅ければ謀慮此よ阻詰しければ問者を出
 して寄手の陣を伺ひせしよ一向絶糧の勢を見ず却て城中糧米日
 ヲに乏絶を告げれば家衡是よの百計盡き殆困じ果たれば武衡是
 等を知るのみか千任の振舞も面よくし城内糧米一たび盡きなば
 何を以か防戦せん今より降を乞ひ身命を存するよじかざと思慮
 全く決しければ間使を以て新羅三郎義光よ就偏へよ御家人と成
 忠節を盡すべくも候既よ安部宗任向よ恩赦を蒙り候例も是ある
 以上の武衡も今より身命を投うち忠誠を屬むべきの勿論の事よ

候先初ての功を立てん爲内應いたせ申べし當城の大手の家衡一
 万余人よて守り搦手は藤原千任五千人よて之を守り武衡よ於て
 は巡視を掌どりいへば搦手へ義光公は出勢是あらば城内よて千
 任を討取城門を開き勢を引入武衡軍兵を引連出城仕候の
 疑もあるまじと只管よ歎き申ける義光中々聽受玉はず其儘使者
 を追返しけるよ猶再三の歎願なれば既よ彼の言越し如く宗任の
 例もわり旁々一と先將軍へ言上せんと此旨披露有ければ將軍太
 に怒らせ玉ひ武衡と宗任とは一概の例を以て推かたし宗任は武
 勇万人よ勝れし身の已か身命と投うつて降参よ出たり武衡今已
 の兄を賣て身を全ふせんと欲す不義の甚しき者と云ふへし況や
 辨舌を以て其不義を飾るをや決して許容成かたしとわりければ
 武衡又申入けるハ城邊まで涉發向在らせられ御從臣一人玉ハリ
 候ハ一某か意中心底を委細よ申拔ぎ候べしとの事なれば止む事

を得ず義光瀧口季方といふ究竟の勇士と擇まれ城中へ遁り去るべしと定める瀧口季方謹んで御請ひ紺地の無紋の狩衣を着し大太刀を横たへ只一人深夜を待て搦手の堀際より至り相待り馳て木戸を開て請ひける季方城中より入て四方を視れり兵備殊に嚴重なり見えたりける武衛迎へて大に喜こひ善美を尽して饗應し扱ありて武衛申出けるは某元來家衡の逆謀に與するも非す不圖も之に應じて今更後悔此上なく身の措所なきに似たり仰き願くは其罪を宥されば將軍の幕下より隨從して犬馬の勞を尽し一家の安堵を望み候なり此意然へくは周旋を仰候と季方へ引出物として砂金を一盃贈ける季方是を見向もせず打笑ひ寶を以て誘ふ小人の所業當家よ於ては此事なし今與羽の動乱は武士の至要は大刀長刀然るより邊は金銀もて此季方を誘ひて降人の周旋させんとし玉ふは拙策ならずといひがたし今番之を拒むが爲は生捕らんと

と玉の是非よ及のす此城中へ單身よて入來る以上は豈も其覺悟のあからんやと勇義の辨論は人々恐怖したりける古人の所謂四方よ使して君命を辱しめざる士といふべしといわれしは季方の如き人をこりいふからめ其時武衛奮服し何條去る事の有べきか何分然べく頼み入るとぞ謝したりける季方辭して城を出る方の陣へ歸來り此旨一々義光へ報しければ義光之を聞得て更に將軍へ願はれるは將軍決して許容なく武衛は身法に武士よこり降参甚覺束な心縦令信實降参するとも斯る者を御方よして更に益あきとならん唯打捨て置へしとのみ答へ玉ふ四五日過て賊將家衡より使者を以て申越けるは扱も我々當城を守り御勢を引受合戦よ及ふと既よ三年幸ひよして今日まで陥没せざ然り空いへ共此地の人民と惱む將軍をして勤且勞せむるは本懐よ我々所あり依て此回戰場は快戦を爲し家運の興廢を試みたは右よ就て

城中よの婦人童子の斃累する者多く是あり是は大よ快戦の妨げよ
 して幕下よ於ても之を殺戮し玉ふ謂れあければ何とぞ攻口一
 方を解玉ひて是等の者を退城致させたくあはれ此事は許容是あ
 るよ於ての城中數万人の婦女子一命と全ふする次第も是あり
 旁々聴受を仰き奉つるといと丁寧よ言送けれの幕下の諸士之
 を聞て扱は落城明日よありと悦ひ請か随意一方を解て退去せし
 むるこり至當なれと評議して後將軍之言上しけれの將軍聞て夫
 の相成ざる旨返答よ及ふへしとの事なれば使者を歸して其後よ
 諸士の集り評しけるは平素仁心深き將軍よ似ず扱も刻なる事よ
 こりと陰言爲してありければ聽て諸士を召集め給ひ我今賊の懇
 請を許容せざると尤軍事の秘術よ弱年の者共の聞置へし賊共
 兵糧の乏く成て爲へき術なく城中の婦女子を驅て食よ城外よ就
 らめ兵士の糧を幾日の間紓延とする爲なり之を許さの五日よて

陥る城は十日を保し十日よ陥る其城の二十日の間を保するな
 ら因て願を許容せず此事心得置べしと諸將よ令して攻口を殊よ
 嚴密よ守らせければ賊の計畧の中ざるより兵糧彌乏しく成落城
 近きよあるべしと思はぬ人のなかりける將軍の深慮感ず可き事
 よこり

義家將軍敵の間者よ就て反間を放事

義家將軍よの先日賊將藤原千任が櫓よ上りて寄手よ向ひ種々の
 悪言を吐き故將軍を誹謗したるを心よ怒り玉へども其時攻るも
 功なきを察する故よ諸軍を制して退き玉ふも心中よの何とぞ千
 任を生捕て孝養よ備んと日夜心よ絶ざりしが風と一計を廻らし
 玉ひ或日下知の有けるは奴僕の中より五十人心利たる者を探み
 調度の小者よ備ふべし但新參故參并生國等何の處を擇ぶよ及ば
 ず利發を以て主とすべし速よ人選して出すべしとありければ主

管の人々之選出しけるも賊の間者忽ち家衡より此事を報ぜ去より
 家衡聞て是幸の事なり随分利發の者を選び官軍の陣中へ因縁を
 求させ多く其内へ容置ける將軍早くも是を察し間者と覺しき者
 共よの却て心置なく浴室などよて物がたりありけるも或時將軍
 例の如く浴し玉ひ彼小者らよ背を洗とを命じつゝ側りら近習を
 呼給ひ今宵は密に栗屋村へ行なれば老臣等よの知ぬより從者二
 三十人召具すへし時刻の例の通初夜過り行へきされば其心
 搦へ爲へしと命し玉へ彼城中の間者よは此事を聞と均しく已
 が仲間よ密に告げ城中へこり報じければ家衡聞て大に悦び扱ひ
 義家栗屋村よ忍妻ありて折節通ふと覺えたり今宵其途よ軍兵を
 埋伏して取圍みて討ならば義家の首を取ると鼠を捕より尙易か
 りと雀躍して其手配をなしけるが又更と思ふよう義家縱令小勢
 なり共定て精兵を召具すなるべし去るを侮り戒備あくる逃する

事のなからずやはと選兵三百人を藤原千任よ授け其意を詳かよ
 告しかば千任聞て大に悦び待てバ甘露の日和ありとは此らの事
 を言あらん近日城中粮米缺乏なれば其粮を紓むる爲よ婦女子を
 出城させんと謀れども寄手も是を知る者か中々是承諾せず兵士
 屈して奮さるより殆ど危み有けるも斯る事こり天の與え將軍を
 生捕來り寄手の奴らよ泡吹せん奇なり奇ありと賞嘆し又更言
 けるは然る以上の官軍の兵糧を皆悉く取収め進で出羽を押領し
 遂よ奥地を蚕食せば關八州も圖るべし涉運の開くは此時なりと
 勇みよ勇みて薄暮より三百人の選兵を引率して栗屋村の此方な
 る小松原の小高き林よ埋伏して將軍の今や來ると待掛たり扱又
 義家將軍よは近臣よ命ぜられ彼新參の小者等の皆打崩ふて詰居
 か如何よや密に見て來とありければ直よ彼等を尋ぬるよ何れへ
 行しや過半の居ず將軍之を聞玉ひ頻よ頷きあはしつゝ密に鎌倉

權五郎景政大宅太郎光房を呼寄られ云々の事よ就き敵の間者を
 反問とし事大略も成就しぬ汝等急ぎ精兵五百人を率ひ栗屋村よ
 馳向ひ大將千任を生捕るべし城中よて伏兵の大將たる者の多く
 の彼も極りたり家衛武衛よはあらずかし又今宵我二三十騎を従
 へて栗屋村へ行儀を粧ひ途中より我一人引返し我代よの平太夫
 を遣すべし然る時の間者共亦此事を城中へ報ずる事は必定なり
 報ずるの有ことなれば城兵彌疑がふべからず此旨心得よかし
 と下知ありけるより景政光房五百の精兵を引率して密に栗屋村
 へ急ぎける將軍よは近臣二十人召づれられて汝ら我の途中より
 引返し名代たる平太夫と我と同様よ心得て栗屋村へ忍ひ行べし
 と平太夫共外近臣と共も初夜過くる頃竊に陣營を忍ひ出栗屋村
 の方へ行玉ふますばやと思ひ彼問者の中よりして又一人ぞ逃去
 ける將軍の途中より竊に陣中へ忍歸り玉ひ直に命令を下し新參

の小者を一人も余さず之を縛して詰問しけるは問者猶十一人ぞ
 残りける夫より將軍よの本陣の粧飾を命し玉ひ燈明を点し軍
 神を祭り大將清衡を始め譜代の臣下と俄に召集え義光以下三公
 達の左乃座も列り諸士の右の座も列り軍兵の都て左右も引添て
 扣たり陣の内外も大將を焚せ白晝よりも猶明くいと嚴重よこり
 見えよけり將軍よの諸士を待玉ひ事云々もあるからは今宵の合
 戦勝利疑なきのみならず必千任を生捕來るべし各寅の刻まで待
 つけて生捕のさまを見物あれと杯を玉ひ酒宴數刻も及び皆々
 將軍の奇謀妙計を賛歎してぞ祝しける將軍の謀りし如く向は忍
 出たる時幾人の間者か走て之を家衛よ告しかば家衛更も使者を
 以て千任も報じたりけれは千任又更も大よ喜び天へも登る心地
 して將軍乃來るを今やと待かけたなり

賊將藤原千任を生捕る事

斯て藤原千任は三百余人を小松原の林中に埋伏し將軍の來り玉ふを今か今かと待付しよ忽見る忍ひやかよ足音して二十人計此方へ來る武士ありけれの千任是を見るよりもすの將軍の來りしぞ生捕よせよと點頭合不意に起りて二十人と真中より圍みたり中よも千任大音あげいかよ將軍斯く争亂の世よ當り五十の山路よ杖突年よ尙好色の止ずして隱妻の許へ通ふとの呆果たる痴氣の大將夫を誅罰せん爲よ藤原千任此處よ待と久しいぞ尋常よ面縛せよと呼はりたり三浦平太夫爲次之を聞からくと打咲ひ今宵將軍の御下知として藤原千任を生捕るが爲三浦平太夫向ふたり狼狽者の老龜千任今天下の良將と仰がれ玉ふ義家公かゝる控行の有べきや淺慮の匹夫我大將の計策よ陥りり自から知ざる狐鼠の逆賊腕を廻して縛を受ずやいかよいと責罵り二十余

人の英士の面々抜つれよと切て蒐れば千任の之を聞よりも扱は我爰よ來りし事を知らよ逃去たりと覺えたり肉なき羹食ふよ甲斐あし押取込て皆首よして義家が白髮の一頭よ換呉んと言聲未終らざるよ右の林よ閃聲發り一手の兵士二百余人忽然として殺出しければ千任は之よ仰天しすばや敵の計略よ陥りたるぞ引退けと下知しけれバ案よ相違の賊兵共城中さして引入らんとするよ暗さは暗し地の凹凸御方の八方よ掩殺す千任も今の堪へかね真先かけて引退けば三百余人ひた崩れ崩れ立てぞ見へたりける大將助兼大音揚逃る兵士よ目なかけぞ大將千任と見るならば有無を言せず引擲て生捕よせよと真先よ進みて追かける千任今の叶ひじと思ひ定て兵士を下知し遁れんとすれば敵の遁さじ引返して追散せ遂も死ぬ身は進みて死ぬと大返しよ取て返し必死よなりたる奮撃突戰助兼も進みかねてぞ見えければ千任は是

を見るより是時ぞ戦引よ引揚よと兵士をまとめて引退き二三町
 逃延て己よ敵聲も遠かり漸く心を安じて休息して有けるも側
 農家より忽然として火起り四邊白晝の如くなればこは如何と驚
 く間あらばこり煙裏よ起る関の聲真先よ一員の大將大音あけ將
 軍の命を受け大宅太郎光房汝を爰よ待と久し速かよ物の具脱て
 縛を受よと呼はりたり千任之を聞て大よ驚き戦ふ氣力のあらば
 こり逃散よ逃退く大將已よ斯の如し兵士如何ぞ防戦すべき八方
 へ逃散ければ光房の軍兵彼所よ討取此よ生捕功名する者限なし
 光房千任を見るよりも大音あけ千任汝逃るとも逃るよ場所のあ
 らずかし返し合て戦へと馬よ一鞭間近く成ければ千任は今之
 までと馬引返して打て掛る千任は長刀光房は大太刀よ渡合二
 十余合戦ひしが光房喚ひて打太刀よ千任の肩先三寸許切込れ長
 刀打捨逃散よこり逃去よぞ光房之を見るよりも汚し千任逃ると

て逃さんやと眞一文字よ追かけるあや只今追付んぞ見通申
 光房の馬木の根まゆまづき前足を引て伏せければ光房左へ飛下
 る千任の是よ隙を得て跡をも見ずして逃去つ、又二三町行程よ
 今の外城近ければ爰よ大よ安堵して此合戦の城中へ聞え事
 よもあらじさらば援兵の来らぬ事はあるべからずと心頼よ待た
 る折から並本よ添て武者一騎馬を早めて馳來るの敵か味方か如
 何ぞやと認むる間もなく彼武者は天地よ響く大音あけ將軍の下
 知を受け汝を生捕其爲よ鎌倉權五郎景政爰よ待と尤久し急ぎ下
 馬して縛を受よと罵りければ千任の聞て南無三寶是は叶ぬと
 馬を返して逃んとするよ追後れたる光房の跡の方より馳來るよ
 千任の進退度を失ひ一條の斜路え走り入らんとする所を景政衝
 と馬を乗よせ千任よ無手と搦よと見えしが上帯執て引かつぎ目
 よりも高く掀け上げ弓杖四五丈投出せば千任は石よて腰を打た

れ立事さへも叶はぬ處は光房折よく取付て忽細を掛たりける景
 政光房兩人して千任と引て本陣へ歸來り幕外より大音あけ唯今
 千任と生捕りて候と呼はりたり幕中一同よさめき立將軍の妙
 計をこり感しける斯て諸大將列坐の中へ千任を引居將軍先盟款
 ありて軍神を拜し玉ひ扱千任は向ひいかは千任汝向日城樓は在
 て故將軍の事を悪口したると覺えあらん今一度此席まで申べし
 と責玉ひけれ共千任の一言の返答なく首を垂て居たりければ將
 軍再三責玉ひて汝が故將軍を誹謗せし一言吾胸中は片時も忘る
 と能はず故は今日一計を構へて生捕たるは汝か悪言を今一度
 聞んか爲なり是非は今一度申へしと幾回か責玉へば千任は
 首を擧此言某か心中より出しはあらず大將武術某か後ま在て追
 討て是を言しむるのみ某豈は故將軍の往時追討の美勳を記せさ
 ちんや然るは已むべきを得ずして此不敵の言は及ぶたり某か罪

斧鐵は伏すも猶餘りありぞと謝しよける義家咲ひ玉ひ汝今日
 至て罪を他人は譲んと欲するか身法の陳謝を以て斯る惡人の舌を
 扱て後來を戒しゆ以て故將軍は謝せずんばあるべからずと有け
 れば近臣渡邊源太夫進み出千任か口中へ手を入て舌を引出さん
 としてけれは義家之を制し玉ひ虎口は臨むは戒心せずんば過ち
 有んと聽て鉄火筋を以て口を押割汝よくも先頃の悪口をこり致
 しつれ其舌乃根と引出し切て捨んと立掛を千任は口をくひしめ
 て開かであれは向齒を打毀ちて口は火筋をしんしと爲し口中へ
 張おきて舌を釘抜よて引出し切て捨たりける古人の言る口の禍
 ひの門と已の悪言より此世からなる閻魔の應心地よくこり見え
 よける千任の苦痛甚しく暫ありて息絶たりやがて其屍を高き木
 よ釣上げ源氏譜第の郎黨集りすは切刻ける將軍計策圖は當り
 此誅戮を快くするを得たりと人々悦ひ合りける

將軍計畧陣營を焼拂ひせ玉ふ事
 斯て源家の諸軍の昨夜の合戦は千任を生捕城兵多く打取勇進み
 て曉天より城を押し寄せ攻立れど城中は昨夜千任を生捕れ城兵
 多く討られたれば出戦の勢ひなく只大木大石を多く下し遠矢を以
 て防ぎける故官軍手疵を負ふ者多く未陥入る勢ひならねば先戦
 の是まてと揚貝吹せ一旦陣營へ引揚たり是より日毎に成じり攻
 めれど城兵も堅く守りて少も屈せず稍冬天に赴きければ北風
 強く雪降り出し双方共兵を収て雪の晴るを待たりける斯る時
 より官軍より兵糧多く糧貯の番も亦少なからねば兵勢自然と勇
 氣強く雪の晴るを待つけし一戦せんを競ひ賊は此は異せり
 て兵糧大に缺乏し暮れ成ては如何やと士氣も自と衰へて城の陷
 るも遠かるまじも勇氣弛みせ見えければ共大將家衡少も屈せず
 我謀計の裏をかき千任を生捕れはるむり還候おれ時機を圖て此

怨みを報せんも士卒を勵まむ軍威は墮さず城守して居たり
 けるが此冬の雪の類は降年まで人々苦寒を發兼いとおびじりて
 有けるが十一月十四日の夜に至て雪晴て快明の天となり成りま
 ける此時將軍僱使助兼大宅光任兩人を呼出し扱も此頃より諸軍
 幾回か手強く城を攻るといへ共堅固にして落城の勢ひなきは他
 なし奇手唯力攻め攻ると以て士卒は損傷多きのみよて功を成す
 と能はず此頃雪天の續たるよ因て暫く休戦してければ兵士の勢
 ひ必ず火の如くならん我一計を設て家衡を討取べし今夜我陣中
 よ令して諸陣營を焼て暖氣を其火よ取て十分よ身体を温めて相
 待へし合戦の不意よ起る事あるへければ其時より面々搦手へ引
 廻して攻入るへし又權太夫景成權五郎景政三浦平太夫并み清衡
 の一類よは陣營の事よは聊も携はるとかく備を堅め賊兵を追て
 直よ付入よして城を乗取るへし又秩父十郎よの城後の徑路或の

溪間よ兵を埋伏して逃遁する者を討取去と下知し玉ひければ
 各領承して申けるの御謀慮神妙は是有べしといへ共若賊の柵中
 より出戦せぬ其時の如何とも爲しがたく且明日より野陣いたし
 候の一段困難を招くべきか此御處置如何よやと危みければ汝
 等の討論尤も善し然りといへ共賊兵近日兵糧竭乏するとの婦女
 子退城の一言よて已に確然たり且千任の生捕るより兵士退去
 の念を挿むや必せを唯賊將家術剛強不屈の心を以て縋よ士卒を
 督勵し數日の保守を爲せるのみ到底城を出て一快戦と思はざる
 とを得ず況て客冬官軍の陣營は失火の事有し時出戦して小利を
 占たる縱もあれば家術必勝機と定めて出戦するの掌を指が如し
 其時よして十分よ攻付て追絶りて城よ入らぬ明日中よは陥入る
 べし陣屋を焼とも明日の金澤の城よ入り暇食寝陸隨たるへと
 と有ければ諸將大に感服去大宅太郎光房の急き陣營自焼の命を

藩陣へとりの傳へける景成景政清衛爲次爲宗も即時よ馬よ飼
 ひ兵糧を食し物の具を若し既よ陣屋を離れて乗出せぬ秩父武綱
 も同く伏兵よ引率して城後の山へ出行ければ備仗助兼兵卒は下
 知して掛並たる陣屋々々一時よ火をぞ掛たりける頃ハ十一月
 廿一日北風強く火勢勵しく紅焰四方よ散乱して只見る天地白晝
 の如くなれば賊將家術之と見てすの敵陣は失火あり去冬も斯の
 如く有しよ我大軍を進て大に勝利を得たり今又敵陣は火災の起
 るの天の家術を助け玉ふ所なりと俄に城兵よ下知して出戦せん
 とす武衛の今日まで將軍へ降伏を乞命を待の時なれ共此火災よ
 因て忽ち變心を生じいかよも此騒動よ乘じて一戦せば將軍を討
 取て長く家運を開くべしと家術と謀じ合せ其身真先よ進で軍兵
 七千余人を下知して打て出る其者共よの黒澤四郎則任の子安倍
 九郎則武鳥の海彌三郎が養子次郎家治沼五郎則高を先陣として

関の聲と發せ城門をさつと押開て乗出す大將家衡も一万余人を
 引率して後陣より續き太山の崩れ如き勢にて出戦せり將軍遙は是
 と見て我計圖より中り城兵殘らず打て出たるを窺かよ左右より引分
 せ陣前近く進ませよと下知ありければ城兵謀ととの露しらず一
 同は將軍の陣頭へ押かゝる家衡元來思慮深ければ是形勢は太よ
 不審し心得ざる敵の舉動かを陣營の失火は敵兵騒擾すべきもの
 を左のなくして静り返りて敵なきの又もや將軍の謀計は陥いり
 たるは非ざるか容易に進で後前すれ只一同は引揚よと下知する
 聲の終らぬ内左の方より関の聲大よ起り關のあやあし寄手の太勢
 家衡の先陣目掛て攻寄することは如何よと見る内よ又右の方より
 寄手の大兵家衡が麾下目掛て攻寄れば城兵今の引は引れず止む
 とを得ず應取す家衡馬上に立土り敵の謀のあれは逆何程の事か
 南の切拂て追崩せよ其身陣前は進出左右を下知して戦ふたり寄

手の兵の今夜ひとへは賊柵を陥しいれんと奮撃突戰當り難く見
 えければ家衡武衛聲をからし今城より引入らんとせば追討は死傷
 の多きのみならず本城まで陥いらん一步も退く事なかれと自身
 大薙刀を打振りて當るを幸ひ切て廻る其勢は惡鬼羅刹の荒たる
 如く忽二十余人を馬の左右へ薙倒す寄手の兵も此猛勇よしバ
 猶豫して見へければ家衡下知してすのや敵の引色なるぞ此圖を
 抜さす追散せよと勢よ乗りて進む所は城の大手の方よあたりて俄
 り關の聲發せ一手の軍隊押出し直よ城を乗取んと進み來たり真
 先よの鎌倉權五郎景政大太刀を真向よ差かざして城門目かけて
 押かゝる城中固より少勢なれい争か防戦は叶ふへき忽城門を乗
 破られ城兵の擲手さして逃走る城將家衡是を見て大よ驚き南無
 三寶城を取れての叶いよと馬を返して城よ入らんとする處よ景
 政早くも八方よ火をかけければ炎一面よ燃上よ家衡今はなすへ

きやうきく然らば立たりしは従ふ士卒の之を見てはや思は
て思ひけん大將の下知も用はこり各が隨意落行ける

武衛生捕られ糺明誅戮の事

此時城兵鳥の海次郎兵部九郎兩人は武衛より従て敵を防きて有け
るが味方の兵は散々よ落失せ或の討れしかり今は是迄と思ひ最
早御生害あるへしと勸めければとも其心の更まなく家衛の生死も
未知れされば面々は此處より防戦あるへし我は一ト先此を逃れ重
ねて本意を達すへしといひ捨て馬の首を振向て間道よりぞ落行
けり鳥の海次郎の大小怒り日比も似ぬ臆病の大將か今此時
よ未練の最期をなすならん後代までの恥辱なりと踏止て馬かけ
居安部貞任が舍弟黒澤四郎則任の嫡子安部九郎則武鳥の海彌三
郎が嫡子次郎家治運極りて討死するぞ我と思ひん者あらは來て
我首取るへしと群がる番手へ切て入り八方より切伏て三十人を討

せけり自身も數ヶ所の深手を負ければ兩人馬上より刺違ひてぞ
死したりける天晴勇々しき討死と人々感じけるをなん又大將武
衛の妻子あつかしと思ひけん城邊よさまよひ此方彼方と尋ね
れども行衛の更又知れざれば城の裏道をたどりつ、唯一騎よて
落て行斯る處よ秩父十郎武綱の將軍の下知と受城の裏手よ兵を
伏せ落人來らば生捕んと手よ唾しまつ所よ武衛一騎遁れ來たる
を見るよりもすはや落武者ごさんなれと押取圍て討て掛れば武
衛今のは是までと太刀抜設けて切て廻り七八人を薙倒せば秩父十
郎大又怒り自身よ太刀を抜かざし二十余合ぞ戦ひしが武衛いら
つて打太刀を忽ち拂ひ落し其儘進みて無手と搏聊かなり共働ら
かせず直に繩を掛たりける扱又城將家衛の城中へ入らんとする
よ一面の炎と成て燃揚れり今は是非あし討死せんと思ひしが又
思ひ返すやう我叛逆を思ひ立既よ奇手を引受て敵を惱ますと既

一戰回三年の久もきよして纒よ城の陥いるとて無下は討死すべ
 きよあらざ我一度恥を忍び義家を討得ずとも義光なり共討とり
 て此報酬を爲されば耐忍おしといふべきのみ左る後生害するな
 らば心の關も暗ぬべし噫まかなりと胸よ問胸よ答て五千余人の
 殘兵を引率して老臣沼太郎は先陣させ金澤の城の西北なる吳葉
 山へぞ分入ける抑々此吳葉山の奥羽兩國へ亘る高山よして森々
 たる樹林天を挽し峻々たる岩石地よ蟠る熊徑鳥路城郭よりも堅
 固よして樵夫鬪男も容易に登らず家衛五千余人を引率して此處
 へぞ引籠る民家を毀て陣屋を建て又遠近より兵糧を取入て寄手
 來ば思ふほど戰ふて討死せんと覺悟を極めて待掛たり扱又義家
 將軍の謀と圖よ中り一瞬の間の戰よ金澤の柵を陥いれ大將武衛
 を生捕けれ共家衛武運未盡す五千余人を引率して吳葉山よ樓よ
 しを閉給ひ直よ鎌倉權五郎景政秩父十郎武綱三浦平太夫爲次よ

一万余人を授け家衛を討取べしと命し玉ふ三將命を受けて三隊よ
 別れ吳葉山へと馳向ふ時しも冬の半よして山麓までも雪埋み天
 造地殿の峻山なれば中々容易よ登らるべき勢ならず各先山麓よ
 屯して在けるか三浦平太夫氣をいらち斯猶豫して攻討ずんは何
 の日よか功をなさんや縦令峻岨の山なりとも敵も登りて屯すれ
 は我世よ昇るを得ざるあらんや爲次先登すへきぞと馬乗出して
 進み登れば十郎武綱左ありと同じ續て馬を馳出し進て山へ登ら
 んと木の根岩角をつたいて迭よ聲を掛合せ力を助けて進みける
 よ手足凍えて動ともすれは踏跌りて谷底よ陥入る者も少なから
 ずされども聊か屈する色なく爲次武綱其先よ進み既よ山腹よ登
 りみるよ家衛の軍兵四五千入陣を張て扣へたれば爲次之を見る
 よりも手兵を下知して無二無三よ押掛る家衛兵士を左右よ下知
 じ山上より有合岩石を一同よ撞と投落せば寄手の兵之よ打れて

死する者數知らず十郎武綱さらし屈せず千騎か一騎なるまで
 も同じ死する者ならば登て敵と組て死ね何條恐るゝとかはと士
 卒を勵まし下知すれこれ氣を得て一同い曳聲出して進登る
 家衡の士卒ら元より期したる事なれ防き留るも今更益なし
 唯追落して大將目かけて討て取れと五千余人一同い鬨を發して
 切て下る送ふ必死を極めたる戦おれば岩石時たつ深山よ雪さえ
 二三尺消殘れば此の木根よ跌つき倒れ彼の谷踏跌らし山よ山
 なす死人の山寄手猛しといふといへ共山上山下の地の理の得失
 輒ともすれば追落され死傷の者も多かりき平太夫爲次斯てい御
 方始終危しと自身直先よ馳進み大太刀を振閃めかし城兵の中へ
 面も振ず切て入り三浦平太夫此よ在り御方の面々續けくんと聲
 掛て敵を討つと麻の如く山上よ馳上り屹と見れば大將家衡士卒
 を下知して有けれいすいや家衡遙さじと太刀翼甲よ差かざし家

衡目掛て切て掛る家衡之とみるよりもござかじき爲次が武勇立
 いて物見せんを長刀を打振て爲次と相戦ふ事三十余合未勝負も
 見えざりしが爲次運や盡たりけん側ある岩よ跌き倒るゝ處を家
 衡得たりと乗りかより起しも立てず首をかゝんとする處と爲次
 が郎黨村越九郎馳來り家衡が後ろより仰向よ引倒さんとしてけ
 れば家衡顧み邪魔ひろくなと弓手を伸して村越が首筋搦んで小
 脇よ引付一としめじめれば兩眼飛出し其儘息は絶たりける爲次
 の此間よ馬手指抜て家衡が脇腹刺んと刺損じ太腹深く突貫ぬく
 家衡之よ少しも屈せず爲次の首を掻切て立揚り寄手の方よて一
 方の大將たる三浦平太夫爲次の家衡が打取たり我よ用なき此首
 を其郎黨よ取せんと寄手の中へ投込たり此勇戦を見るよりもさ
 しも勇心官軍も恐れて家衡を捕留んとする者なく送巡してぞ
 勇へたりける十郎武綱聲を荒らげ爲次と某と命を奉して討手よ

向ひ爲次一人討死して我獨生て歸るも面目なし武綱決死と覺悟せりと太刀先鋭とく城兵を八方よ切倒し家衡と搏て勝負を決せんと進み掛れば官軍是も勵まされ一步も戦地を退かず此山中の土となれと聲々よ呼はりて少志もひるまず戦ふたり爰も家衡か老臣沼太郎とて其力量二十人よ敵するのみか太刀打の達人ありしが今日は主人の一世の死場なり花々しく門戦して平素の武勇を觀さんと眞先よ進て戦ひしが今武綱の必死の勇戦よ難立られ味方死傷の多きを見て臆て此手へ馳來り大太刀拔て切立しがもどかしとや思ひけん一園もある岩石を磔よなして投付れり此石よ中る者誰か一人支え得ん腦を碎かれ足を折象棋倒しよ成ければ流石寄手の猛兵も猶豫じてこり見へよけり

鎌倉權五郎勇猛の事

井家衝鋒の事

爰も權五郎景政の武綱爲次と共に吳葉山へ攻寄しが獨心よ念よる斯の如きの大軍よて此嶮山へ攻上るとも一騎立の一騎勝負非常の功のあるべからずと自分一隊の山麓より引分れ遙二十町余隔たる西の方なる山村に至り兩三名の樵夫を雇ひ是を御導として登る羊腸馬の麓よ皆繋かせて二千五百余人を引率して歩行立よて陟りける山雪脛と没し凝寒處を裂鳥も通ぬ坂阪峻嶺高藤よ絶り樹根を攀辛苦の間よ兵卒谷よ陷たる者も多く有りけるよ景政少しも屈せず纒よ山間の平地よ出けれり爰よて餐を傳へしめ雪を啜て湯茶よ代え又もや嶮岨と登りつゝや、半腹と思ふ頃東方よ當て関の聲の聞えるの今合戦の酣あらんと忍て敵陣の背後よ出竊よ斥兵を遣はして其形勢を見せけるよ歸り報じて云けるの陣營の兵士一人も有る事なく老卒四五十人集り居れりと注進しければ景政聞て大よ悦むさらば攻掛りて家衡を生捕る

へしと用意れ松明よ火を注て一聲の閃の聲と共よ陣屋の處をよ
 投掛れの一度よ撥と燃移るをば見向もせず家衡の勢の背より山
 を下りよ討て掛れの家衡大よ愕きすはや敵の背へ廻りしぞ取て
 返して追拂へど山上へ引返さんとなしけるよ前よの武綱後ろよ
 景政夾んで是を撃べ家衡は前後の敵よ度を失ひ軍兵或の谷よ轉
 び或の岩よ打碎かれ過半は此よ討れたり景政思ふ儘よ敵を惱ま
 し一人も遁しひせじものと八方へ眼をくばりて立たる所へ沼太
 郎の背後の敵の強しと聞山上目かけて登り來り太刀閃めかまて
 切立けるか景政を見ると均しく莞爾と笑ひ是我敵手よ不足の者
 じと大音あげりれよ扣召るゝの敵の大將ととり見たるの僻目か
 斯く申某の家衡が老臣よ沼太郎時任是なり冥途の上産よ召連行
 かん其名を名乗と聲懸れば景政聞て呵々と咲ひ汝何程の力量あ
 りてかく大言よ及ぶぞや力の程を見て後よ勝負をなして取ら

んと云へり太郎の打咲ひ力を見たくは是見よと側へよ在し一圓
 よも余ると見ゆる大石をいと輕々と引起し景政目掛投て付たり
 景政咲て中よて受留斯の如きの石ころを擲うつは小兒といへど
 も爲し得へしものや力は夫まてかと問れて太郎は大よせき立是
 見よかじといふかと思へは側の一尺周もあらんかと思ふ計の櫃
 の木を大地を割て根と共よこり引抜て景政目掛て打てかゝるを
 木の中程を丁と取留腕と握て引倒さんどす沼太郎は木を取れし
 と此方へ引き逃よ曳と引合ひしか景政一と曳強く引くよ太郎の
 是を取られじと力を極て引時よ景政忽ち手を放てり已か力よ余
 されて後へよ撞と倒れたり景政直よ其木を奪ひつゝけ様よ打居
 けれの血を吐てこり死んでけり敵味方の軍兵の是を見る者驚き
 て鬼神の業とぞ恐れける城兵の特み切たる沼太郎も既よ討れて
 膽寒く皆八方へ逃失けり家衡の此時までよ高き岩頭よ跨りて見

物して有けるが沼太郎は已に討れ其余の兵士或は討れ或は逃て
 今の一人の在る者をければ我も生害すべけれど短刀拔持已に脇
 腹へ突立んとする所は權五郎景政遙く是を見るよりも一文字は
 馳來り家衡が短刀持たる右の手を丁と搦りたれば家衡短刀
 投捨て、景政とぞ引搦たり家衡の關八州奥羽は北類なき大力よ
 て双方勢らぬ龍虎の争上よ爲り下よなり組つほこれつ争ひしが
 景政一身の力を極め側の岩よ右足を踏張て家衡を押倒さんと爲
 しかければ彼大石を踏返し組たるまゝ、よ兩人とも三四間の阪下へ
 這て共よ落よける景政の強く岩石よて腋腹を打しかバひるむ所
 と家衡の景政を取て押へ首を掻んとなしける時先は短刀の投捨
 たれば餘方盡て景政の腰刀を引奪りんとしてければ景政の是を
 抜せず押へて下より刃返さんとするを家衡是と起さず腰刀を奪
 拔んとあせりけるかゝる所え秩父十郎武綱は逃る敵を追捲り何



源家西勇
 家衡ヲ生
 捕ル

ぞ家衡も出會て首取呉れんと此所彼所尋廻るも端なくも景政
 家衡組合て景政下も組しかれ危き体を見るよりも何かは以て猶
 豫すべき馳下て家衡も無手と組み引倒さんとする故も家衡は隻
 手を以て武綱を捻伏せんと爲たれども武綱も聞ゆる大力ありけ
 れば少しも撓まず引倒さんとする此時景政短刀よて下より刺り刺
 すべきを生捕よせんと思より稍手の弛むと忽ち下より刃かへし
 兩人よて押へて繩と掛たりける實も家衡の勇力も古今無雙と云
 ふべきなり扱武綱景政兩人は士卒も家衡を警固せしめ將軍の本
 陣へこり引行けるはや山頭よの敵一人もあらざれば鯨波の聲よ
 引換て嶺の松風颯々たり義家將軍よの金澤の柵の焼跡も本陣を
 居玉ひ首實檢も終りければ家衡武衡兩人を引出させ家衡も予さ
 れけるの汝三年以來天道も逆ひ王命も抗し賊徒の首領と爲て人
 民を害慮す一門の誅滅今思ひ知るべしとありければ家衡阿々と

打笑ひ惡逆不道と言なれども此合戦の起因を推すも某も始まる
 ん非ず且又大丈夫の一旦事を揚し上は其素懷を達せずして徒も
 止むべきも非らず今敗軍して生捕らるゝも天なり命なり争か思
 ひ知るとあらむ況や戦争の必勝負の有者なれば若吾勝ば又汝を
 吾如くすべきのみ何の性しむ事か有らん唯吾已か勇も誇り天下
 も敵なしと思ひし事の悔ても甲斐なま其餘の別も後悔すべき事
 はなし疾々討てど其後は口を閉て一言せず流石家衡の勇氣膽略
 三年王師も抗せしも亦宜かりと人々感じける此日家衡武衡兩人
 共誅戮もこり行のれ奥羽全く平静もこり成りけり又海道小太郎
 成衡の幼息も信夫の郡を賜り三浦平太夫が跡目も同じく相續
 を命じ其外軍功ある者も恩祿をぞ賜りける夫より鎮守府へ歸陣
 し玉ひ其後上洛ありて賊徒誅戮の趣奏聞ありければ感ありて
 官位昇進し玉ふ此時義家よの藤原清衡を以て鎮守府將軍たると

を請ひければ義家之推舉あれば其在よ堪べしと宣下を賜りけ
 る清衡の家の宿目と深く源家の恩を拜謝せしとあん是より幾年
 を経て天仁元年の夏の初より義家病ふ係り玉ひ同年秋八月二十
 九日卒法し玉ふ歳六十有八とぞ聞へける義家六子ありし嫡子左
 兵衛尉義宗父は先ちて卒す二男式部丞義親三男帶刀長義國四男
 河内守義忠五男陸奥五郎義時六男陸奥六郎義隆よして其中義忠
 勇武父はゆづらず季父新羅三郎義光よ殺さる次男義親後對馬守
 と爲り罪ありて誅せられ幼孤爲義あり義家奇とし玉ひ是を世嗣
 と爲し玉ふ即六條判官爲義是なり爲義驍名世よ顯はる其子義朝
 よ殺され義朝又其臣長田忠致よ殺され其子賴朝總追捕使と爲り
 府と鎌倉よ開き武門の棟梁として源家益々蕃盛なり然れども其
 盛んなるや全祖先賴義義家の大勳勞よ因て然る者なりと義國の
 子孫よ新田義貞足利尊氏あり徳川氏も亦是義國よ出る者と知る

べし

二百九十八

明治十九年十二月一日版權免許

同廿年七月日刻成

定價金四拾錢

茨城縣士族

著作人 神田民衛

神田區山本町十番地寄留

東京府平民

出版人 中島儀市

京橋區木挽町一丁目八番地

發兌 今古堂

日本橋區新和泉町一番地

東京專賣書肆

辻文鶴聲社 兎屋 上田屋 春陽堂 鈴喜

山藤大川屋 金櫻堂 明進堂 秩山堂 自由閣

愛友舍



